

JCLA

日本比較文学会東京支部

研究報告

No. 12 - 2015

# 目 次

## 追悼

- 小宮彰先生を悼む 小玉晃一..... 2

## 研究報告

- ペルセウスの怪獣退治とスサノヲの八岐大蛇退治 山口博..... 5
- 夏目漱石『野分』の「カルチュア」  
—大正期「教養」／「文化」概念成立への形成過程—  
大山英樹..... 10
- 西洋文学を私小説として読み直してみる —太宰治『女の決闘』を巡って—  
イザベル・ラヴェル..... 15
- 三千代の神経衰弱と S. Weir Mitchell の休息療法 仙葉豊..... 21
- 翁久允研究の方向性について  
—そのコスモポリタニズムと複合アイデンティティーをめぐって—  
須田満..... 28

## 特別企画

- ヘンリー・ジェイムズの『使者たち』における創作手法と欧米文化の衝突について  
秋山正幸..... 34
- 作家芹沢光治良の肖像 —父と暮らした日々—  
岡玲子..... 40

## 第 52 回東京大会シンポジウム

- 第一次世界大戦と日本モダニティの変容 井上健..... 45

## 記録

- 東京支部 2014 年研究発表の記録..... 49

- 執筆者一覧..... 53

## 《追悼》

### 小宮彰先生を悼む

小玉晃一

人はトシをとると病気がふえると言われる。まったくその通りである。そして親しい人の死に接することも多くなる。私もこれまでに何人の親しい先生方の追悼文を『比較文学』や東京支部の『研究報告』に書いてきたことか。思い出す度に悲しいことであるが、今書きつつあるのは小宮彰さんのことである。彼は、あと半月で85歳(現在6月27日)になる私より一回り半の若さ、67歳で1月17日、心不全で亡くなった。数年前から脳梗塞の発作で具合の悪そうな様子で心配していたが、まさかこんなに早く亡くなるとは思わなかったし、また学会の若き同労者小宮さんの追悼文を書くようになるとは夢にも思わなかった。大切な人を失った悲しみは大きい。故大沢吉博さんのときは、『学会会報』で中途半端な字数しか与えられなかったが、今回は枚数を言われていないので、自由に書かせて頂く。もちろん小宮さんと私は専門がまったく違うので、学問的なことは書けないが、長い期間の交流の一端を書かせて頂く。

もう20年近く前、会場は成城大学だったかと思う。今、手元に資料がないので、はっきりしたことはわからないが、小宮さんが児童文学の安房直子について発表されたことがある。発表は淡々と進んで行ったが、ハンドアウトの安房直子の作品を彼が読み始めたときに、私はなにか異常なものを感じ、小宮さんの方を見ると、彼は明らかに涙を流しているのである。涙声なのである。聴衆の何人が気づいたか知らないが、私は作品に打ち込んだ彼の人間性に触れた思いがして胸が一杯になった。研究者は客観的で対象に対して冷静でなくてはならないのは当然であろうが、何百回、何千回も人の話をきいてきた私が、涙声でやっと朗読する小宮さんを見たとき、何とも言えない好感を彼に抱いた。いま思い出しても胸が熱くなる。これが私の小宮さんに対する印象の中心をなすものだ。こういう気持ちで私は長年彼と接してきたつもりである。

小宮さんと日本比較文学会との縁は、1977年の関西支部大会での研究発表「ハーバート・ノーマンと安藤昌益 —思想テキストの比較研究と文体の問題について—」で、次いで1978年東京支部例会での発表「思想テキストの評価と研究 —ハーバート・ノーマン『忘れられた思想家安藤昌益のこと』—」である。彼と私の学会での接点は1981年の仙台大会で、彼の研究発表「シュピッツァーとデイドロ —文体分析と時間性—」の司会を私がしたことである。何故私がこんなむづかしいテーマの司会をやることになったのかわからないが、関西の学会本部からの命令で引き受けたために、小宮さん

と何度か手紙のやりとりがあった。この時から親しくなったと言えるだろう。しかも彼の住居と私の生まれ育ったところが近かったことにもよる。

1990年8月の松江大会へ行く途次、岡山駅で乗り換えのときに小宮さんとバツタリ会った。お互いに一人だったので、一緒に座ったが、列車が出るまでに時間があつたからか、彼は売店でジュースを買ってきて、私にも一本下さった。気が利く人だなと思ったが、人から何かしてもらおうと気になってしょうがない性分のわたくしは、それ以後まさに気になって仕方なかった。のちに食事を一緒にすることができてホッとした。列車の中の話の続きで、松江大会の懇親会の際、少し酔った彼は、シラフの私によく話し、私は彼のことをよく理解したつもりである。

1991年夏のICLA(国際比較文学会)東京大会が青山学院大学で開催されたとき、その準備段階から、残務整理まで、私がいわゆる〈駒場の三羽鳥〉と呼ぶ故大沢さん、井上健さんと共に実によくやっておられたと思う。手伝っていた私の教え子たち何人かは、彼らにごちそうになった由。こういうお祭りのときは、華やかな人間関係ができるものだ。

その後も、学会の仕事を小宮さんと一緒にやったが、彼の特技は「規約をつくる」ことであった。私も全国や支部の規約改正委員会に連ならせて頂いた。私は会計のことと規約のことはチンプンカンプンだったが、常に彼が中心になってまとめていた。現在施行されているものの多くは、彼が中心になってつくられたのだと思う。そういう時にみせる彼の態度は誠実、実直そのものだった。頑固なところはあったが、人に不快感を与えるものではなかった。

こんなことを書いていくときりがないが、なんととっても、30数年の付き合いで、しかも同じ東京支部で、ほとんど毎月あつていたのだから思い出は尽きない。

1998年(平成10)は、学会創立50周年にあたる。(1948年[昭和23]創立)1997年の理事会で、記念大会と学会史編纂の二つの記念事業が決定された。学会の歴史については東京支部が責任をもつことになり、2000年4月に刊行することになった。当時東京支部長であった私が責任者で、支部の主な役員十数名が協力することになった。限られた時間で、本部の50年と各支部の何十年かの歴史を一巻にまとめるのは大変な作業であった。委員たちの大変な努力で、或るところまではいったが、大げさに言えば校訂と整理、つまり最後のまとめは少数でなければできない。そこで最終的には小宮彰、井上健と私の三人で責任をもつことになった。3人は実によくやったと思う。とくに私よりかなり若い二人のエネルギーは並大抵のものではなく、お互いに連絡を密にしながら、仕事を進めていった。井上さんの東京工大の外国語教育センターの部屋に度々集まり、各自整理したものはファックスまたは電話で連絡しあうこととした。井上さんのファックスは午前2時ごろ、小宮さんのファックスは午前4時ごろから5時ごろ。私も二人にある程度付き合わざるを得なかったが、血圧が上がってしまい、主治医か

ら嚴重注意された。今となつては、これも懐かしい思い出である。やっと間に合わせて、予定通り『比較文学』42巻[2000年3月]に「日本比較文学会の50年」と題する50年史を載せることができた。当然のことながら、ミスは多く、『比較文学』43巻に「訂正」を載せて貰った。

この編集に関わった何年間はまことに充実した年月で、小宮・井上・小玉の三人の協力も見事なものだったと、井上さんと共に亡き小宮さんに感謝したい気持ちでいっぱいである。お互いに本務校でも忙しかったので、打ち上げ式も行わず、さっぱりしたものだった。小宮さんの思い出では、この「五十年史」の編集が一番強烈である。上田敏のいう細心精緻の彼がいなかったら、われわれの作業はもっと大変だったろう。

小宮さんは理性的であったが、前述したように、人情家でもあった。彼をおかしい人のように思っている人もいたようだが、一度知ってしまうと、あんなにいい人はいなかったと思う。私は、私をはじめクセのある変わった人の多い学会のなかでは一番いい人だったのではないかと今では思っている。時々学会へ教え子を連れてこられていたが、私の教え子にも親切にしてくださった。

東京女子大学教授在任中に亡くなられた小宮氏は比較文学会では、理事や東京支部長、全国の代表理事をつとめられた大事な人であり、この早世は大変惜しまれる。

2009年に刊行された彼の『デイドロとルソー 言語と《時》—18世紀思想の可能性—』の〈あとがき〉によると、彼の師である東大名誉教授の河原忠彦氏とたった二人でデイドロの研究会を月に一回30年以上もやり、デイドロとその周辺の思想家のテキストを読んでいた。これは驚くべきことである。河原教授もさりながら、小宮氏のこの熱情と執念こそ学者に最も必要なものであるが、この情熱が小宮さんをして安房直子に向けさせて、私を感激させたのであろう。

この文章を書きながら、小宮氏のことを懐かしく思い出しているが、安房直子さんの『北風の忘れたハンカチ』がこの度出版され、私の親しい同僚であった神宮輝夫氏との対談も載っている。小宮さんを偲びながらこの作品を読むつもりである。そして私が追悼文を書くのも、これを最後にしたい。小宮さんのご冥福を心から祈る次第である。

# ペルセウスの怪獣退治とスサノヲの八岐大蛇退治

山口 博

スサノヲの八岐大蛇退治神話は、かなり特異性を持つ。土着性の強い『出雲国風土記』にはないのに、『記紀』にはある。これはこの神話が大和王権により創られたということである。また、蛇は日本では田の神・水の神であり、崇拜こそすれ、退治する思想はない。

それに比してユーラシア西方諸国の多頭竜蛇は、例えばギリシアの一〇〇頭蛇のラドン、メソポタミアの七頭蛇のムシュマツへ、シリアの三頭蛇のレヴィアタン、ブルガリアの三頭蛇ズメイなど、竜蛇は諸悪の根源であり、退治すべき存在であった。この点からも、八岐大蛇退治神話のモチーフが、西方から伝播してきた思想であることは明らかである。

このようなことを最初に指摘した学者は、ハートランド (E.S.Hartland) 『ペルセウス伝説』(一八九四—一八九六)、アストン (W.G. Aston) 『日本神道論』(一九〇五)で、日本人学者としては、木村鷹太郎『世界的研究に基づける日本太古史』(一九一一)を挙げることが出来る。例えば木村は、日本本神話の中にペルシア文化の影響のあることを言う一例として「斯くして、希臘のヘーラクレスの九頭竜退治とペルセウスの海獣退治の神話とは、須佐之男命のオロチ退治の神話に混合し、ペルセウスのアンドロメダは須佐之男命の稲田姫と同一たるなり」と述べている。

この見解は深く検証されることもなく、今日の『記紀』の注釈書にも「類話」「同型」「共通性」などという表現で引用され、なぜ同型なのか、なぜ共通性を持つのかに踏み込むことなく、一步退いた所で踏みとどまる。その理由を、この説に傾倒する比較文学の碩学松村武雄は『日本神話の研究』で、「この見方にも若干のひげ目がある。(中略)我が国への伝播が、いかなる特定の地域・民族から行われたかについては、今のところ全く不明である」と告白する。私は「不明」の「地域・民族」を解明することを志し、『創られたスサノオ神話』(中公叢書)及び「スサノオはこうして創られた」(『中央公論』二〇一二・一二)を公にした。八岐大蛇退治をも含めて、スサノヲ神話自体がユーラシアに広く流布している英雄叙事詩に基づく創作であることを、多くの資料を引用して明らかにしたのである。

私説の核を為したのが、ユーラシア中部から東部にかけて流布する多頭竜蛇退治の伝承である。今まで全く閑却されていた東北アジアの資料を読み解くことによって、多くの例を引き出すことが出来た。英雄に退治される竜蛇の代表名は「うわばみ」を意味する鱗古斯(マンガス)である。ロシアの一五頭マンガイス、南シベリアの一〇

○頭鱗古斯、モンゴルの二五頭鱗古斯、中国東北部オロチョン族九頭鱗貌、中国西北部サラ族九頭莽斯中国西北部キルギス族七頭鱗古茲など、かなり多くの鱗古斯退治の伝承を得ることが出来た。中国の東部、漢民族地域の例はない。漢民族にとって竜は皇帝のシンボルであったからである。西方の多頭竜蛇退治の英雄神話は、ユーラシア北方ステップ地帯を東西に活躍していた遊牧騎馬民族により、西から東へ運ばれたことが分かる。

しかし、忸怩たる思いがしたのは、取り上げた多くの資料が、西方の多頭竜蛇退治の話のような古代に遡り得るものではないということである。伝承の時間的把握は非常に難しいのだが、ロシアのスラヴ民族の多頭竜蛇退治の話を語り継ぐ『ブイリーナ』は、一〇世紀から一一世紀し、中国少数民族の伝承は、現代採取の資料である。比較的研究の進んでいるモンゴル英雄叙事詩『ゲセル』にしても、その発生は、八～九世紀、一〇～一三世紀、一五世紀以降と定まらない。同じく怪物退治のモンゴル英雄叙事詩『ジャンガル』についても、研究者により六世紀から始まって一八世紀までの大幅なばらつきがある。この状況では、目いっぱい遡らせて、八世紀成立の『記紀』のスサノオ神話への影響を説いても、説得性に欠けるのではないか。

ペルセウスとアンドロメダ神話のスサノヲ神話へ 【匈奴墓出土銀製円盤飾り】の影響を言うには、この時間的問題を解決しなければならない。それにもう一つ空間的問題がある。多頭竜蛇退治の話の東進を認める研究者は、その運び手として、ギリシア神話を剣鞘や矢を入れるゴリュトスに画いて東西を闊歩したスキタイを挙げる。しかし、スキタイの進出の証明できるのは、南シベリアまでであり、多くのマングス退治説話の残るモンゴルまでの東進の痕跡は、現時点では指摘できない。西方とモンゴルを結ぶのはスキタイではなく、紀元前三世紀から紀元後五世紀まで活躍をしていた匈奴であったのではないか。

この仮説を裏付けるための資料を求めて、匈奴の遺跡・遺物を探るべくモンゴルの博物館・考古学研究所を訪問、国立モンゴル博物館とモンゴル科学アカデミー考古学研究所共同編纂の図録を入手した。その図録には西方の男女の人物を刻んだ銀製円盤飾りが掲載されていた。二〇〇六年に発掘されたノヨン・オール（ノイン・ウラ）二〇号墓出土の直径一五センチの円盤で、図録解説には「ギリシアの神を打ち出した銀製飾り」とのみある。

私は次のような理由から、これはペルセウスとアンドロメダの刻画と判断したのである。

- 1 波が描かれており、海上である。ギリシア神話で海上における男女の話はペルセウス・アンドロメダが有名である。
- 2 前五世紀頃から、ペルセウス・アンドロメダの絵が、陶器や壁画として多数画かれている。
- 3 女性が片手を男性の方に差しかざしているのは、ポンペイの壁画などに見られ

るように、腕が岩に縛られているのである。女性の肩から首、胸にかけて、鎖状のものが見られるが、これは女性を岩に縛り付けておく鎖と思われる。

- 4 女性の肩から上方に曲りくねって伸びているものは、一五世紀から一七世紀の画家コジモ、カラッチ、チェザリなどの画から推測して怪獣の尾と考えられる。
- 5 アポロドーロス『ギリシア神話』では「海の怪獣」だが、ブルフィンチ『ギリシア・ローマ神話』では蛇になっている。コジモ、チェザリの画く怪獣は脚のあるドラゴンであり、一九世紀のエドワード・ブルーネ・ジョーンズ、アデレードの画く怪獣は蛇である。怪獣は描く人によりいかようにも変貌するのである。
- 6 男性の坐しているのは、胸部を切割かれた怪獣で、その上に男性は跨っていると思われ、木村鷹太郎の言う「怪獣の背に躍り跨り、刀を抜きて遂に之れを刺し殺し」に相当すると思われる。コジモも怪獣の上に立ち、刀を振るうペルセウスを画いている。
- 7 銀製飾りの左下に小さく祈るようなポーズの神像が画かれているが、救出を見詰める人物を画くことは、ポンベいの壁画以来多くなされている。ブルフィンチ『ギリシア・ローマ神話』でも「海岸に集まっていた人たちは、山々も反響するほどにはやし立てました」とある。
- 8 ペルセウスはメデッサの首を提示することにより怪獣を退治する話もあるが、メデッサの首提げている絵は、ポンベいの壁画の三枚の中の一つだけで、後世に至るまで刀・槍で怪獣と戦うペルセウスを画く。

などである。

研究発表後に、ヘラクレスではないかとの意見が寄せられた。既に木村鷹太郎はペルセウスと共にヘラクレスをも挙げているので、ヘラクレスとも考えたのだが、ヘラクレスのシンボルである鬚も棍棒も画かれていないし、何よりも女性に絡まる鎖はヘラクレスでは説明できないので、ペルセウスと判断したのである。もっともヘラクレスであっても 私の考えている西方の多頭竜蛇退治のスサノヲ神話の影響の主旨は変わらないが。

私は推定を確かなものにする傍証として、類似の画像を求めた。ペルセウス・アンドロメダを画いた絵画は、先にも画家の名を挙げたように、現代にまで及び、その数は百点近くもあろうか。望むのはスキタイ、匈奴の時代の作品である。現存最古は、現在ベルリン博物館島にある旧博物館展示の前六世紀前半のコリントス製のアンフォラである。次に古いのは前四五〇～四四〇年製作の陶器画である。これらの画像を見ると、ペルセウス・アンドロメダの話が記載された作品によりかなり異なるように、絵画も作家の自由な発想に基づき、個性を打ち出すために、類例を見出すことはかなり困難であった。類例を見つけられない銀製円盤飾りの画像も、類例がないからとて否定はできないことが明らかになったのである。

モンゴルから帰国後、来日したモンゴルアカデミー考古学研究所のエルデン・オチル氏に会うことが出来た。オチル氏は二〇号墓の発掘を手掛け、銀製円盤飾りを掘り出したその人である。オチル氏に銀製円盤飾りの刻画はペルセウス・アンドロメダ神



話ではないかとうかがうと、モンゴルの研究者も共同発掘のロシア考古学者も、その線で考えているとのことであった。銀製円盤飾りは現在ロシアにおいて修復中で、それについての正式報告書が出されるのは、二、三年後とのことであった。

匈奴の活動区域は広い。漢武帝の時代には中国の北京近くまで侵入しているし、遼寧省には墳墓もある。騎馬遊牧民には国境はない。民族間の交流も盛んである。紀元前二世紀から紀元後一世紀にかけて匈奴周辺には、東に鮮卑・烏丸、北に丁零、南の羌、西に堅昆・呼揭・烏孫・大宛・康居・大月氏・罽賓などが跋扈して、入り乱れて興亡分裂を繰り返していた。文物も神話伝承も容易に伝播し得たのである。

ユーラシアの中央から東方にかけての古代の多頭竜蛇退治神話を求めることは、匈奴の銀製円盤の発見によりクリアされた。西方メソポタミア辺から発生した多頭竜蛇退治の神話、具体的にはペルセウスとアンドロメダ神話は、匈奴など遊牧騎馬民族により東進、ユーラシア北方に多頭竜蛇退治英雄叙事詩を生み出した。それが渡来人により日本列島に持ち込まれ、大和王権は巧みに換骨奪胎してスサノヲの八岐大蛇退治の神話を創りあげたと考えられるのである。

ハートランド、アストン、木村鷹太郎らが指摘した、八岐大蛇神話はペルセウスとアンドロメダ神話が原拠とする見解は正しかったのである。

なおこの研究発表内容詳細は、論文「八岐大蛇退治のルーツはペルセウス神話か—初公開のモンゴル出土遺物から—」と題して、文芸雑誌『大地』第26号（金沢・平成二十六年十二月）に掲載されたこと、関係拙著として『創られたスサノオ神話』（中公叢書・二〇一二）のあることを付記しておく。

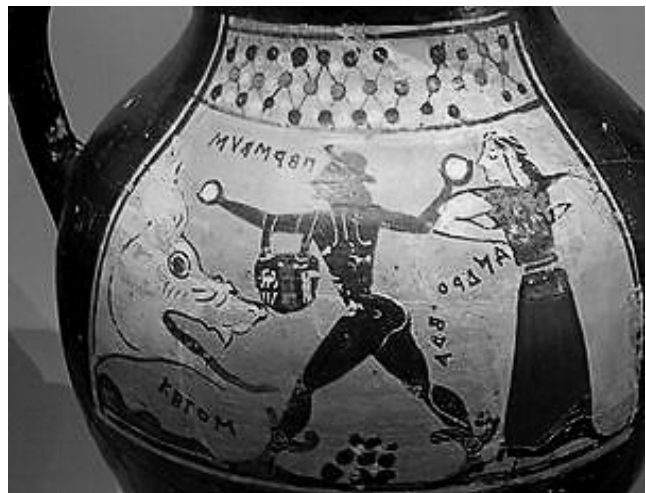


Noyon Uul, Tomb 20

書名  
TREASURES OF THE XIONGNU  
編集・発行  
INSTITUTE OF ARCHAEOLOGY MONGOLIAN  
ACADEMY OF SCIENCES  
NATIONAL MUSEUM OF MONGOLIA  
発行年  
2011  
掲載頁  
p.128



同上図一部拡大



書名  
GREEK VASES GODS, HEROES AND MORTALS  
編集・発行  
ANTIKENSAMMLUNG STAATLICHE MUSEEN ZU  
BERLIN  
発行年  
2010  
掲載頁  
p.25

# 夏目漱石『野分』の「カルチュア」

大正期「教養」／「文化」概念成立への形成過程

大山 英樹

## はじめに

教師を辞め、文筆業に転身した『野分』（一九〇七年）の白井道也は、ちょうどその発表と同年に教師を辞め、朝日新聞専属作家となった作者漱石と、発表直後からしばしば重ねられて考えられてきた。その後、作品を閉じた世界と捉えるテキスト論が隆盛したために、道也と漱石の関係が論じられることは少なくなった。だがそれによって、漱石がどのように白井道也という人物を造形したかについて検証される機会も減じたように感じられる。今回の発表では、白井道也の造形について、漱石は自分自身ではなく、他の二名の人物をモデルにした可能性を指摘したい。一人は『野分』執筆時期に交流があったと思われる、文芸評論家・雑誌編集者の大町桂月（一八六九—一九二五）。もう一人は、若き日の漱石の文学観の確立に影響を与えたと考えられるイギリスの詩人・批評家のマシュー・アーノルド Matthew Arnold（一八二二—一八八八）。この二人の「教養人」が、白井道也を生み出す契機となったという仮説を検証していきたい。

## 一 白井道也と大町桂月

白井道也は作中、「人格論」と呼ばれる書物の刊行を目指している。『野分』が雑誌『ホトトギス』に発表されるのは、一九〇七年（明治四〇年）一月のことだが、明治三〇年代終わりから大正期にかけて、この「人格」は、哲学界を超え一般でもよく語られる、ある種の流行語と言える言葉だった。例えば漱石が『野分』を構想中であつたと考えられる一九〇六年（明治三九年）十月に、雑誌『実業之日本』から「人格の修養」特集と冠された臨時増刊号が刊行されている。この他にも雑誌記事や論文等に「人格」の語は広く使われており、その結果、この語の持つ意味も論者によって少々異なる意味付けがなされた。従って「人格」に関する議論を展開すること自体は、当時として珍しいものではなく、道也及び作者に独創性があるとは言いがたい。それを考慮しても、注目すべき偶然がひとつある。それは、この「人格」をテーマのひとつとした『野分』という作品が発表されたのと同月に、雑誌『太陽』に「人格は

芸術也」というテーマの重なる評論が発表されたことである。この文章の主旨は、昨今の文学者が読者の興味に迎合する傾向があることを非難し、「国民文学」の大成のため、文学者の「人格の修養」を説くものだが、商業的成功よりも精神的な達成をより重視する姿勢に、道也の著作や演説の主旨と共通点がある。先の『実業之日本』特集号は、当時高名な政治家や企業家の成功の秘訣を「人格」に見出している。これが当時の一般的な「人格」に対する見方であり、商業的成功を墮落と考えるような発想は珍しい。そのため、やや特殊な論調で「人格」をテーマとした二つの文章が、同時に違う雑誌に掲載されたことは、注目に値する。

この「人格は芸術也」を発表した人物が、当時『太陽』の編集を務めていた大町桂月である。桂月は文章家として当時それなりの知名度があった人物であり、実は、東京帝大卒後、地方で中学教師を経験し、その後、編集者に転身し、学生時代から生活に苦しみ、文筆は生計を立てる手段であったことなど、白井道也との共通点を多く見出すことができる。

桂月は漱石の二歳下であり、東京帝大の在学期間が重なるが、この時期、両者に交流があった形跡はない。両者の直接的交流が始まったのは一九〇六年夏頃であり、桂月主催の講演会に漱石が招かれ登壇するのが一九〇六年九月二十三日。『野分』作中終盤の道也の出席する演説会はこれがモチーフとされており、桂月と漱石の交流と『野分』の物語が展開する時間軸は、ほぼ一致する。それならば、桂月の演説を耳にした漱石が、それに関心を抱き、小説に活かした可能性は十分に考えられる。だがこのとき漱石自身も演説しており、自身の演説を小説に転用した、あるいは漱石の演説に桂月が影響を受けたという可能性ももちろん考えられる。残念ながらこの演説会の内容は記録されていないので、これ以上の検証は難しい。ただ道也が中野宅を訪れ、筆録記事を書くくんだりなどは、漱石が取材を受けたときの経験を下に書いたと考えるのが自然だろう。漱石は桂月から、『太陽』への執筆依頼を受けたことがある。

ところで桂月は、漱石の『猫』に実名で言及がある。作中、主人公珍野苦沙弥は「現今一流の批評家」桂月をこき下ろす。これは元を辿れば、酒の飲めない漱石を桂月が『太陽』誌上で皮肉ったことへの意趣返しと思われる。漱石は親しい者への私信でも桂月を悪しざまに書いており、これを字義通りに受け取るならば、両者の関係は悪いと見える。だが実際は、この『猫』を巡るやり取りの最中にこの二人は書簡を交わしており、その文面を見る限り敵意を感じることはできない。仮に両者が険悪ならば、桂月が講演を漱石に依頼し、それを漱石が受けるのは不合理である。また、桂月がその後発表した「夏目漱石論」（『太陽』一九〇七年十一月）は漱石を激賞する内容となっている。これらをつなげて考えると、あるいは『猫』の桂月の描写は、親しい者だからこそ許容できる冗談のようなものだったと解釈できる。

漱石は桂月について次のように述べている。「僕は桂月の文を見ては一向に感心しな

い、何でも無い事を書いてるとしか思つて居なかつたし、今でも書いてる物には左程敬服はしないがね、逢つて見ると感心したよ、と言ふのは桂月は珍しい善人なんだ。僕は今の世に珍しい伶俐気の無い、誠に善い人だと思つたよ。僕は誰にも桂月の事は讃めてるんだがね」（『東京朝日新聞』一九〇七年四月三日付）。一見好意的なようでありながら、「文を見ては一向に感心しない」とは手厳しく、また「珍しい善人」という漱石の桂月評も皮肉とも見て取れる。だが桂月の求めに応じて講演会に参加したことは事実であり、漱石が桂月に好意を持ったことは確かだろう。桂月の人間性に魅力を感じながらも、洞察に優れた漱石は、彼の迂闊さや愚かさも同時に感じたのではないか。そのような複雑な感想の入り交じった発言と思われる。

この鋭い人間観察の目は、『野分』の語り手の白井道也に対する語り口に共通するものがある。例えば、語り手が道也に投げかける次の言葉、「世が容れぬなら何故こちらから世に容れられようとはせぬ？」（一）。あるいは次の、語り手の道也評である。「筆硯に命を籠むる道也先生は、ただ人生の一大事因縁に着して、他を顧みるの暇なきが故に、暮るる秋の寒きを知らず、虫の音の細るを知らず、世の人のわれにつれなきを知らず、爪の先に垢のたまるを知らず、蛸寺の柿の落ちた事は無論知らぬ。」（八）。

こうした語り手の道也に対する批判を踏まえると、白井道也を漱石の分身的存在とするのはやや問題があるだろう。勿論、作者が分身的存在を描く時に自己批判性を持つことはありえる。そのため白井道也の造形には漱石自身の自己分析も含まれているだろう。だが、この作品に関しては、ちょうど執筆期に交流を持ち関心を寄せた、大町桂月という人物の与えた影響をよく検討する必要があるだろう。

## 二 白井道也の演説とマシュー・アーノルド

物語終盤の白井道也の演説にひとつ気になる表現がある。道也は「金持ち」を批判し、「学者」の特別性を主張するが、そのとき「金持ち」には「カルチュア」がない、「学者」のみが「カルチュア」があると述べる。

culture という語には今日最も一般的な訳語である「文化」のほか、「より洗練された文化」の意で派生した「教養」という意味もあるため、この道也の表現は一見すると違和感はない。しかしこの culture の語が、「文化」等に訳され、思想哲学界のみならず広く一般に普及するのは、大正期以降であり、『野分』が発表される一九〇七年（明治四〇年）の時点では、多くの日本人にとって聞きなれぬ言葉であった。そのため当時の読者に、この「カルチュア」がないという表現が意味するものを知ることは困難であったと推測される。

では作者漱石は何かから culture という概念を学んだのか。漱石の蔵書にマシュー・ア

アーノルドの *Culture and Anarchy* (一八六九年) という culture を表題に含む著作がある。アーノルドは『文学論』(一九〇七年)の中にしばしば言及があり、彼のことを漱石が英文学批評家として相応に評価していたことは知られているが、漱石がアーノルドから受けた影響は、より大きなものであった可能性がある。

漱石のアーノルドに対する言及は、漱石がまだ学生だった一八八九年(明治二二年)十二月の、友人正岡子規宛書簡に見出すことができる。また、翌年一月の子規宛書簡には「文章論」と題する、当時の漱石の小説に対する考え方を述べた文章が付されており、ここに culture への言及がある。「culture トハ如何ナル者ト云フニ knowing the ideas which have been said and known in the world ト小生ハ定義ヲ下ス積リナリ然ラバ culture ヲ得ル方ハト云フニ読書ヲ捨テ、他ノ方ナキハ貴君モ御左袒ナルベシ故ニ読書ヲシ玉ヘト勤ムルナリ」(一九九六年版『漱石全集』第二十二巻より)。この英文まじりで書かれた culture の定義はアーノルドの著作の影響とみてほぼ間違いない。アーノルドは culture を、*Culture and Anarchy* において、the best which has been thought and said in the world (「世界にこれまでに考えられ語られた最善のもの」多田英次訳)と定義している。このとき漱石が直接、参照した著作はアーノルドの別の著作 *Literature and Dogma* (一八七三年)であったと考えられるが、これは *Culture and Anarchy* に続けて書かれたものであり、内容に重複が見られる。後に *Culture and Anarchy* を続けて買い求めていたことも考慮すると、漱石がこの二冊から culture について学んだと見て、ほぼ間違いなからう。

それでは漱石がアーノルドから学んだ culture 概念とはどのようなものか。アーノルドは著作で次のことを主張している。功利主義がはびこる当時のイギリス社会において、「俗物」等の無教養な者たちが幅を利かせ、少数の lovers of culture (「教養の愛好者」)が迫害されている。このままではやがて社会の退廃がひどくなり、どうにも立ち入らぬ時が来る。そのときこそ lovers of culture が社会の無秩序を正す存在となる、と预言する。これは「金持ち」批判及び「学者」の不遇を訴える道也の演説と基本的に同趣旨である。そのため演説をする道也はアーノルドの分身とも考えられる。

だがこの作品の執筆時における漱石が、アーノルドの主張に全面的に同意していたとまで考えるのは早計である。

道也は演説中、聴衆による多くの野次に晒される。聴衆には彼は己の待遇に対する不満を社会のせいにする小物と映る。また道也の妻は彼に対し無理解であるが、道也自身もまた妻に対し無理解である。道也には高柳という信奉者がいるが、それ以外のほとんどの者に理解されず、それでも自身の主張を曲げず、自身の著作を出版することに執着する様は見方によっては滑稽である。「此の作が真面目な現実生活に対する直接の興味を中心にしてゐるに拘らず、茶番的印象を与える」(中村星湖、『早稲田文学』一九〇七年二月)という、この作品に批判的な同時代評があるが、この感想は案外、作者自身の道也に対する見方と重なるかもしれない。作者は道也の思考や生き方

に共感を示す一方で、批判的な眼差しも向けている。この道也に対する共感と批判の混在こそ、漱石のものを見方を理解するための重要な手がかりとなるだろう。

## 結び

白井道也の造形を巡り、影響を与えたと考えられる二人の人物について検討を加えた。だが発表当時から言われたように、道也に漱石自身の自己投影が、たとえ部分的であれ認められることも事実だろう。このとき漱石は、大学を辞め専業作家に転向する契約の話が進行中の時期であり、金銭と学歴・教養の問題は彼にとって切実な問題であったと推察される。そのため、文筆業専門の先輩と言える桂月は漱石の興味を引いたことだろう。桂月の境涯を小説として描くことは、漱石の側に必然性があったと言える。

なお、この作品で漱石がとり上げた culture の問題は、およそ十五年後に日本の思想界で大きな争点となるが、そうした動きとこの作品は直接的な関係はない。しかし、『野分』を検討する際に図らずも着目するに至った「人格」「文化」「教養」の三つの言葉は、それぞれが明治大正期における哲学界で争点化された語であり、この三語の関係性について考えさせられる『野分』という作品は、明治大正期の哲学・思想界の実態を把握するのに優れた材料を提供するものと言えよう。

# 西洋文学を私小説として読み直す

太宰治が読むオイレンベルグ「女の決闘」

イザベル・ラヴェル Isabelle LAVELLE

本稿では太宰治の「女の決闘」という短編作品を題材に、西洋と日本における「自己を語る文学」の違いと、文学における虚構と現実・真実（フィクションとリアリティー）の関係といった、かなり広い範囲で文学について考えていきたい。

本作品は、非常に定義しにくい作品である。文学批評でもあり、小説でもあり、エッセーでもあり、しかし結局のところそのいずれでもないと言える作品だが、まずはこの風変わりな構造について分析したい。

太宰の「女の決闘」は、小説家である「私」が森鷗外の翻訳作品を読者に紹介するという体裁をとり、無名のドイツ人作家ヘルベルト・オイレンベルグが発表した「女の決闘」（一九一一年）を移入した鷗外の訳に注目する。作品の大半は、引用したオイレンベルグのテキストに「私」が筆を加える、という構成からなっている。

オイレンベルグの描く物語の筋は、以下のようなものだ。夫の浮気を知った妻が恋敵であるロシア人の女子医学生に決闘を申し込み、彼女に撃たれて死ぬつもりだったところ、意外にも自分が相手を撃ち殺してしまい、このために自首し、逮捕され、絶食して死ぬ。要約するとメロドラマのように聞こえるかもしれないが、物語は「私」いわく「冷談（原文ママ）」に、つまり、あくまでも客観的に、写實的に描写されている。このオイレンベルグの描く物語に「私」が時々顔を出し、感想や批評を付け足したものが太宰版「女の決闘」だ。

「私」による加筆は引用にコメントを加えるというかたちで始まるものの、物語が進むにつれて、オイレンベルグのテキストに不満を抱いた「私」が自分のテキストに書き直す、というところまで発展する。その原作とは異なった物語の始まる時点から、「私」は突然「私（D A Z A I）」へと変化し、まるで最初から「私＝作者＝太宰治」であったかのように、私小説的とも言える読み方こそが正しい読み方であったのだと、読者がはっきりと理解できる仕組みになっている。

なぜこのような複雑な構造ができたのか。太宰の「女の決闘」は一九四〇年（昭和十五年）一月から六月にかけて『月刊文章』誌上に掲載されたが、『月刊文章』に発表されたということ自体に、本作品の持つ特徴的な構造の理由の一つが挙げられる。

松本和也氏によれば、『月刊文章』は「文章に関する研究・指導・分析・鑑賞などを



主軸として（中略）創作指導や創作余話も多数掲載し、文芸入門誌としての相貌を持つ雑誌であった<sup>注1</sup>。つまり、既に出来上がった作品を楽しむことよりも、どのような制作過程を経て文学作品は出来上がるのか、文学を書く・文学を読むとは具体的に何を意味するのか、ということに興味を持つ読者へ向けた雑誌だったようである。そして、太宰はそこで「文章に関する研究・指導・分析」と創作のすべてを一つの文章の中で追求し、一つのジャンルには収めきれない作品を書き上げたのではないだろうか。

この珍しい構造について、曾根博義氏は次のように述べている。

ここで重要なことは、その結果、太宰の作品全体が、鷗外訳の原作と、『私』が原作に補足したテキストと、そのように改作せずにはいられなかった『私』の物語という、（中略）そもそもレベルの異なった三層のテキストから成っている、ということだけではない。それ以上に大事なものは、新しく作られた作品のなかでは、それらレベルの異なったテキストが同じ一つのテキストを構造し、それぞれのテキストに登場する人物の彼らの間に展開される別々の物語がテキストの境を超えて同一の平面に並べられ、一つの、まったく新しい物語世界を創出しているということである。<sup>注2</sup>

三つのテキストが重なり合い、全く新しい一つのテキストとなっているという点は指摘されている通りだが、ここでは作中の「私＝太宰」が、鷗外とオイレンベルグのような作家と登場人物の関係とは異なるレベルで原作を論じているという点を強調しておきたい。

ここに、鷗外の全集があります。勿論、よそから借りて来たものである。私には、蔵書なんて、ありやしない。（中略）[私は]書見など、いたしたことの無い男である。いつも寝ころんで読み散らしている、甚だ態度が悪い。たゞから、諸君もそのまま、寝ころんだままで、私と一緒に読むがよい。端坐されては困るのである。

「私」は冒頭から自己の無知を演出する。太宰は実際に蔵書を持っていなかった、と友人の檀一雄も書いているので、この自画像は現実の太宰を描いている可能性もあるが、事実であるかどうかに関わらず、自身を無学な人間として紹介している点は、作家のポーズとして捉えることができるだろう。

このポーズの意義についても、考える必要がある。太宰がポーズをつける理由については様々な答えが考えられるが、そのうちの一つは、太宰が作者・作家よりも読者と

<sup>1</sup> 松本和也「月刊文章」『国文学』平成一四年一二月

<sup>2</sup> 曾根博義「『女の決闘』論—「写実」とその主体」『国文学』平成三年四月

して自分自身を位置づけたいから、というものだ。先ほどの引用にもある通り、太宰は「寝ころんだまま」と書いている。ここに、物理的にも肉体的にも読者と同じ姿勢でいたい、という太宰の願望を読み取ることができるのではないだろうか。

「私＝太宰」が自分を読者として描く様子は、次の引用でも見てとれる。原作の客観的描写に不満を抱いた読者としての「私」が、「興味ある仮説」を立てる場面だ。

もう一つ、これは甚だロマンチックの仮説でありますけれども、この小説の描写に於いて見受けられる作者の異常な憎悪感（的確とは、憎悪の一変形でありますから、）直接に、この作中の女主人公に対する抜きさしならぬ感情から出発しているのではないか。すなわち、この小説は、徹底的に事実そのままの資料に拠ったもので、しかも原作者はその事実発生したスキャンダルに決して他人ではなかった、という興味ある仮説を引き出すことが出来るのであります。更に明確にぶちまけるならば、この小品の原作者 HERBERT EULENBERG さん御自身こそ、作中の女房コンスタンチェさんの御亭主であったという恐るべき秘密の匂いを嗅ぎ出すことが出来るのであります。（中略）もとよりこれは嘘であります。ヘルベルト・オイレンベルグさんは、そんな愚かしい家庭のトラブルなど惹き起したお方では無いのであります。

換言すると、嘘であることを承知しながらも、小説に作者の実生活が書かれていると思いきむだけでその作品は面白くなる、と太宰は書いているのではないか。曾根博義氏も次のように解釈している。

[太宰の描く]「別の物語」は原作を原作のいわば内部で書き換えるのではなく、原作の外部にその作者を想定し、その原作者を作中人物の一人に組み込むかたちで（中略）小説全体が進行する。

ここで重要なことは、太宰の言う「甚だロマンチックの仮説」が、原作の文章を書き直さずにそのまま読んだ場合も当てはまる、ということである。読者は「原作の外部」、つまり読者の頭の中で作者像を創造し、とある作中人物は作者自身のことを書いているのだと意識しながら原作を読むことができる。そして、そのように読めば文章はもっと面白くなる、と太宰が書いているように捉えられるのではないだろうか。

そこで、これも仮説ではあるが、太宰がオイレンベルグの「女の決闘」を私小説として読み直している、というアイデアについて考えたい。鈴木登美氏は、私小説をジャンル（すなわちテキスト自体の特色に基づいたもの）としてではなく、読みの「モード」として捉えるほうが効果的であると近年論じている<sup>3</sup>。「私小説」としての文章が先にあるのではなく、登場人物の一人（語り手、または主人公）に作者その人を重

<sup>3</sup> 鈴木登美『語られた自己—日本近代の私小説言説』岩波書店 平成一二年

ね合わせて読もうとする読み手の習慣が「私小説」を創り上げる、という発想である。もちろん、鈴木の考えに反論することも可能だが、「私＝太宰」が最初から自分自身を読者として位置づけていることから分かるように、この作品では、文章はテキストとしての要素のみで成り立っているのではなく、読者もまた構成要素の一つであり、読者の読み方によって文章の意味が大きく変化する、と太宰は論じているのではないだろうか。

もう一点注意しておきたいポイントは、作品の読み方は間違っている（つまり「嘘」であっても）構わない、と「私」が書いている点である。この主張は、私小説をどう捉えるか、どの世代の私小説を指しているのかにもよるが、西洋文学と日本文学とで大きく異なる自己の語り方について触れていると考えられる。

佐伯彰一氏らが分析しているように、ヨーロッパをはじめとした西洋では、古代ギリシャ以来、歴史と文学、事実とフィクションとの区別がしつこく繰り返されてきた<sup>4</sup>。自伝のジャンルではフィリップ・ルジュンヌが『自伝契約』（一九七五年）で示したように、書かれた内容は基本的に事実のみに基づいているという作者と読者との間の約束事が、自伝を成立させる理論上の条件である<sup>5</sup>。モデルはジャン・ジャック・ルソーの『告白』だが、しかし、自伝のカテゴリーに入る作品群が他の形式で自己を語っている作品群（例えば私小説）よりも確固たる現実を語っている、という意味ではないことは言うまでもない。ただ、現実に対する両者姿勢は異なっている、と記述しているにすぎないのである。

また、西洋においても、自伝でも伝記でもフィクションでもない作品が数多く存在するのは、オートフィクションという概念が二十世紀に現れたことから見てとれる。私がここで主張したい点は、私小説は「この話はすべて実話である」と何らかのかたちで文章中に書かれていなくとも、作家の自己の真実を語っているものとして読める文章である、という点だ。

ある文章を、たとえ嘘でも作家の自己を語る文章として読むことができる、と太宰が「女の決闘」で訴えていると考えてもよいのであれば、このような訴えは太宰文学にとって何を意味するのか。太宰文学が私小説であるかどうかという議論は別にして、東郷克美氏が論じているように、太宰は「事実と虚構の境界の無化ないしは相当化」をした作家として有名であることは間違いないと言えよう<sup>6</sup>。言い換えると、太宰は

<sup>4</sup> 佐伯彰一『自伝の世紀』講談社 平成一三年

<sup>5</sup> フィリップ・ルジュンヌ著・花輪光訳『自伝契約』水声社 平成五年

<sup>6</sup> 東郷克美『太宰治という物語』筑摩書房 平成一三年

「かくして、太宰治はこの国の私小説的風土を利用し、いわば読者との共犯関係の中で、私小説的事実も物語の一切片として虚構の枠の中に組み込んでいく。事実と虚構の境界の無化ないしは相当化——それは作家『太宰治』という語り手、あるいは『太宰治』という物語を作りあげていくことではなかったか。」

言葉によって、直接に、真実に、自己が語り得ると信じない作家である。

「女の決闘」よりも一年早く発表された「風の便り」も、事実と虚構の境をぼかしている点で印象深い。

言葉は、感覚から千里もおくれているような気がして、のろくさくって、たまりません。

ここで太宰は、言葉が現実——特に人間の感情といった現実——と奇麗に重なることはない、と書いている。「女の決闘」も同様のテーマを、文学は自己を語り得るのか、という問いを扱っていることを、木村小夜氏が指摘している。保守的な社会の性役割に従わず、ある一人の女性が別の女性に決闘を申し込み、その結果自殺するといった物語に対して、オイレンベルグと太宰の扱いかたの違いを顧みつつ、次のように書いている。

制度的なものによりかかることの限界を自覚した者が、そうした外在的な規範を超えて自己に固有の生を自ら主張してみせる—それが原作の主題であったとすれば、太宰の『女の決闘』において付け加えられたのは、思惟と言葉の一致が当事者の死によってしか自他共に信じられない程、固有の生というものが困難になっている現実であり、原作の主張とはむしろ逆に、言葉で主張出来る確かな自分などありはしない、己の中の理念も規範もない混乱した状況こそリアルとを感じる時代に我々は生きている、ということであった。<sup>注7</sup>

自己を語りえない理由は言葉上の問題だけでなく、言葉で捉えようとしているもの、つまり自己も、リアルな語れるものとして存在しないからである。太宰文学の様々な部分で表現されていることだが、たとえば一九三九年（昭和十四年）の「秋風記」でも、太宰はこの問題を隠喩的に論じていると考えられる。

らっきょうの皮を、むいてむいて、しんまでむいて、何も無い。きっとある、何かある、それを信じて、また、べつのらっきょうの皮を、むいて、むいて、何もない、この猿のかなしみ、わかる？

このような状況では、自己を語る言葉は全て嘘である可能性が高い。太宰がこの状態から逃れるために提示する妥協案とは、言葉の嘘を受け入れ、嘘であるかもしれないということを文章中に示すことである。

ナタリー・サロートの言葉を借りるならば「不信の時代」（言葉に対しての不信、自

<sup>7</sup> 木村小夜、「太宰治『女の決闘』論」（平成十三年、『太宰治翻案作品論』9、和泉書院）。

己という概念に対しての不信)である現代の文学において、本文が展開するにしたがって文章そのものの現実性を否定する作品にこそ、読者を満足させるものは潜んでいるのではないか。

以上をもって、オイレンベルグによる「女の決闘」の再読を通じた太宰治の考察を終了する。

\* 原作の全文引用は、『太宰治全集』(筑摩書房、平成九年七月)による。旧字体は新字体に改めた。

# 三千代の神経衰弱と S. Weir Mitchell の休息療法

仙葉 豊

神経衰弱という心の病が、欧米や日本で大流行をした 19 世紀末前後の状況を考えてみると、この病に関心を持ったさまざまな作家たちが、その症状や療法、そしてこの病を生み出した文化的な要因に強い関心をもったのは当然のことであった。この発表では、神経衰弱に罹患して苦しみ、多くの作品にこの病を重要な要素としてとりあげた夏目漱石と彼の『それから』をとりあげ論じるとともに、アメリカの作家でこの病に苦しんだ Charlotte Perkins Gilman の *Yellow Wallpaper*(1892) と、彼女の主治医でこの病の療法としての“Rest Cure”の唱道者として知られた S. Weir Mitchell をとりあげ、両作品中の神経衰弱のキャラクター設定の比較を試みてみた。

神経衰弱とはもともと「アメリカの病」という形でアメリカの神経科医 George M. Beard によって提唱された神経の病であり、過度の精神的労働や神経の消耗により、当時、文明強国として先頭を走っていたイギリスに追いつけ追い越せの掛け声の下で、国民全体の奮闘が期待されていた、アメリカの国民病として提出されたのだった。もちろん、明治期の西欧文明の受容に全力をあげて奮闘していた日本でも大流行することになる。(仙葉「神経衰弱とは何であったか」、「ビアードと神経衰弱」) ビアードは早死したのだが、盟友ミッチェルは、作家として詩や小説を書きながら、長生きをして神経衰弱の権威ある医者として名前を知られていき、また、その「休息療法」は世界中に喧伝されるようになり、早くも漱石の生きた明治期後半には神経衰弱への療法として日本に入ってきている。

ミッチェルはまた、シャーロット・ギルマンという初期のフェミニストでジャーナリストが、神経衰弱にかかった時の主治医として、この「休息療法を」使って治療に当たってもいる。その「黄色い壁紙」は、ミッチェルの過酷で理不尽な「休息療法」を自ら体験したギルマンの激しい抗議と解釈され、最近のアメリカ文学の中でも再評価の声が高くなっている。神経衰弱患者としてのこのギルマンの若妻と漱石の三千代を比較してみた。

漱石自身の神経衰弱体験を色濃く反映させた神経衰弱患者としての代助の性格はいうまでもあるまい。寝起きに胸に手を当てて「心臓の鼓動」を感じるのは脈を気にする病者の典型的な兆候だろうし、「荒縄」のような「神経系」をしている書生の門野から、病を神経質に気にしすぎだといわれると、代助は自ら「もう病気ですよ」と答えている。また、代助が実家の長井家に遊びに行くと、15 歳になる甥っ子の誠太郎には、自分の腹痛の理由を「又神経だ」とからかわれる始末なのだ。「脳がわるい」という表

現は、当時、神経衰弱やその一般的な用語である脳病などの症状を描写するもので、度会好一によれば、樋口一葉、正岡子規、正宗白鳥などにも使用例が認められ、漱石にもこれは認められるし、頭痛、眩暈、耳鳴り、記憶力減退、不眠などの通例の「症候群」が代助の身にも徐々に現れてくることは佐々木英昭によっても調べられている。意識と知覚が病的に変化していくさまを漱石は克明に描いているのだ。世紀末的な繊細な審美眼や、色や音に対する過度の感受性を一方では高等遊民としての自己の誇りとしつつも、一方では金銭にたよらざるをえない現実の生活からの圧迫を不安に感じている代助なのである。ただ、三千代に関してはヒステリー症状としての記述はあるにせよ、あまり神経衰弱症者としての議論は少ないように思われる。婦人病としてのヒステリーを当時の一般向けの医学文献から辿ってみよう。

感動そのものが直接病原となるのではなくて、すでに潜在して居る病種を刺激して、萌芽さすに過ぎないのである。殊に又、長きに亘る一身上や家庭上の心配苦慮の如き精神過労は、一層有害の誘因をなすものである。ヒステリーが、ことに波乱の絶え間ない家庭や、其の日の煙さえも上げかねる、貧困のもとに多く起こって来るのはこの訳である。某婦人は、夫の放蕩、次に離婚となったことに非常に心を痛め、それから下腹の差し込みが起り、屢々卒倒などすることがあった。・・・

汽車衝突、大地震、洪水、落雷、大火、負傷等の如き所謂災厄に基づいての神経の震盪、驚愕、恐怖等の強激なる感動に続いて、重いヒステリー性の症状が起ることもある。凡て、精神感動でも、身体の外傷でも、受けた時から、このヒステリーが起って来るとも限らない。半年一年、長いものになると、八年十年も後になって起ることもある。某婦人、離縁の再非常には、心痛苦悩し、一年後にヒステリーが起った、又ある少女は、右の腕に怪我をして治り、五年後になって母から怪我の話聞いて、急に其腕が痛くなって数週間も治らなかつた事がある。

『ヒステリーの研究と其療法』 呉秀三校閲 杉江薫著 大正六年

引用からも明らかなように、一般的な婦人ヒステリーの原因は、貧困であり、家庭内の不和であり、長い間の蓄積された「精神過労」なのであった。また、直接的には離婚（そしてここには挙げられていないが流産などもよく原因とされている）などの激しいショックが引き金になるとされていた。これに夫の放蕩などが原因の離婚にいたれば、「屢々卒倒」することがあったというのは、『それから』における三千代と平岡の関係と十分すぎるほど重なってくる。三千代が出産時に子供を失い、平岡の失職と家庭経済の破綻が背景になっているのは言うまでもない。また、三千代は代助の告白のあと、「歇私的里（ヒステリー）の発作に襲われたように思い切って泣いた」のであったし、その翌日、平岡を家から会社に送り出そうとして世話をしながら「突然夫

の襟飾りを持ったまま卒倒した」のであった。そして彼女を診た医者「随分重い神経衰弱に罹っている」と告げている。ヒステリーも神経衰弱もここでは同じ症状もたらずものと考えられているのだろう。さらに、注目に値するのは引用後段のショックの時間差にもとづく病状発症である。ちなみに、ショックという言葉は、『それから』の中でも、二度ほど使われており「打衝」と書かれ「ショック」とルビをふられている。漱石はこの語のもつ心の傷への広がりをよく承知していた。

現在、トラウマとかあるいは PTSD などという精神医学上の概念は良く知られるものとなっているが、元来トラウマという言葉は体の傷を表わしていた。それが、やがてフロイトあたりから「心の傷」というように理解され、一般化してくるのはよく知られていることである。ただ、列車事故や地震などの突然の自然災害に襲われたときのショックから心の傷を受け、それが潜在化したままで、数年後にそれが何かの弾みで症状が再発するという引用のような例は、フロイト以前にもよくみられた症例であったし、江口重幸が言うように、フロイトの「事後性」の概念以前に、シャルコーの「時間的遅延概念」がすでに存在していたのである。また私見によれば、それ以前にビアードの神経衰弱の症例にまで遡ることができる。そう考えてみると、このショック性のトラウマという概念は、意外にも明治の早い時期から日本に入ってきていると考えられよう。シャルコーに関して言えば、その『神経病臨床講義』は、佐藤恒丸によって、明治30年から35年にかけて『東京医事新誌』に連載して訳されており、明治44年には完本として翻訳されている。漱石はこの概念を巧妙にキャラクターのうちに溶かし込んでいるのだ。

『それから』には、代助と三千代が知り合いになるきっかけと、平岡と一緒に大阪に出て行く前のこととして、彼女の置かれた状況の急転が簡潔に記されている。代助と大学での友人だった菅沼の妹として彼女は物語に導入されるのだが、田舎から兄妹のもとに遊びに来ていた母が突然「窒扶斯」になってしまい入院することになる。この見舞いに兄の菅原がいつの間にか「窒扶斯」が伝染してあつという間に兄もなくなってしまう。ここに描かれた三千代の過去の状況の急変は、テキストのページ数にして1頁に満たないものではあるが、彼女の人生にとって大きなショックであっただろうことは推測にかたくない。彼女の母と兄がチフスでともに急死したことは彼女の後年神経衰弱を発症する起因として漱石には捉えられていたのではなかろうか。

日本で初めての精神医学の翻訳といわれる『精神病約説』（明治9年）は、「貌德斯礼（モードスレイ）著 神戸文裁訳」とあり、ヴィクトリア朝の代表的な精神科医ヘンリー・モーズリーの書いた、医学全書の一項である“Insanity”を訳したものであった。文明化、都会化とともに精神の病が急増していることを憂いつつ「其病（精神病）モ共ニ増育シ目下開化ノ度ニ在リテハ狂病ハ必ス購フヘキノ罰銀タリト謂フモ亦信ナリ」と言って、文明開化に伴う精神の病への警鐘をしているのだが、その婦人の心の病の



原因を論じているところに、「室扶斯熱室扶斯様急性発疹病及ビ肺炎ノ如キ急性熱症ニ罹ルノ後狂病ヲ繼発スル事アリ然ル時ハ急性失神ノ状ヲ顕ハス者アリ」とチフスなどの急性の病をえるとそれが後に「狂病」への引き金になることが述べられている。また、シュウレの明治20年1月刊の『精神病学』（江口襄編訳）には、「腸室扶斯ハ尤モ多ク精神病ヲ誘発ス」とみえるから、かなり明治の早い時期から、このチフスという病はいったん治まっても後に心の病を「繼発」するものとしてイメージされていたのだろう。

また、テキストには三千代の神経衰弱気味な様子について微妙な記述がある。代助と久しぶりにあった平岡は、一緒に三千代を連れてこなかった理由として「実は今日つれて来ようと思ったんだけど、何だか汽車に揺れたんで頭が悪いというから宿屋へ置いてきた」と言う。そのあと三千代の子供の死と体調の良くないことが述べられてゆくのだが、その際の、「頭が悪い」といった三千代の病状の描写は、前述のようにやはり神経衰弱と関係があるだろう。長旅と汽車に揺られるということは神経衰弱の「頭が悪くなる」症状の原因と考えられていて、それが一緒に来なかった理由とされているのである。「脳病」という神経衰弱の別名に罹ったものが、いかに汽車に揺られることを恐れたのかは以下の引用からも分かるだろう。筆者の大谷是空は正岡子規の友人で漱石とも縁があったジャーナリストである。脳病に罹って苦しむ是空がとるものもとりあえず、その静養に大磯に汽車で向かう際の乗車の困難さが語られている。ことごと揺れる汽車が脳にさわるのである。

汽車の動揺烈しき為に病にさわることもあらんと 川崎までの切符を買い置きたれば 川崎にて車ををり其処の一小茶店に暫く息らひ次の列車にて横浜に赴きたり 思ひしほどには非りしかども兎角頭痛の烈しければ兼て屢投宿せし汽船問屋和田彦と云ふに入りて二時間ばかり伏して息らい 而して又ぞろ国府津行きに汽車に乗りぬ この度は人も少なく動揺も少なからんと思ひて中等の切符を求めて乗車したるに 何がさて世には上等の人物も多きものと見へ既に四人まで乗り込み居れり 而して中等室には「マット」を厚くしたる腰掛あるが故に車の動揺も下等室ほどには頭に感ぜず最と心地よかりしかど我慢は却て病の害ならめと思ひて大船におり停車場内暫く息らひ次の列車にて漸く夜に入りて大磯にたどりつきぬ

大谷是空「おほいそぎ」(明治22年1月)

「大磯記」を「大急ぎ」としゃれのめしているところはあるのだが、この、汽車の揺れが脳にひびき脳病（神経衰弱といってもいい）を発するという一種の汽車恐怖症の彼の様子はかなり深刻である。新橋から大磯まで途中下車をくりかえして、頭痛を警戒し、座り心地のよい「マット」の状態まで気にしているところなど、彼の気のつ

かい方は尋常ではない。そして行き先が大磯であったのは海辺の保養地が「頭がわるく」なることによく効くという認識が一般化していることを意味している。陸軍軍医総監だった松本順が、神経諸病にいい海水浴奨励のまず最初のものが明治 18 年刊の『大磯誌』で、明治 20 年代には肺病や神経衰弱の保養・療養地としての湘南海岸がポピュラーになっていき、是空もこの流行にしたがっているのである。(仙葉 「漱石の『木屑録』)そして平岡と一緒に大阪から戻ってきた三千代も汽車のせいで「頭がわるく」なり宿で休んでいなければならないのだ。三千代も神経衰弱の症状を呈しているわけだ。次に、ギルマンとミッチェルに移ろう。まず、ギルマンの「黄色い壁紙」の話は以下のようなものである。

夏に、一時的な神経の病で、アメリカの東海岸らしい町の郊外にある植民地風の古風な屋敷に 3 ヶ月ほど療養をすることになった主婦が女主人公で語り手になっている。夫は実務家の医者で、ヒステリックな症状を持つ彼女は一種の隔離療法を施されているのだ。リン酸塩やトニック剤を飲み安静にすることを勧められている。夫はこのまま良くならなかつたら、高名な神経医のミッチェルのところへ送ることになると妻を脅しているのだ。これはミッチェルの休息療法を模倣しているわけだ。唯一の気晴らしの読書も日記をつけるのも神経を刺激するとのことで禁止されている。3 階の大きな子供部屋にベッドを置いてそこで決められていたとおりの療法を一人でこなしていくのだが、そのうちに部屋の黄色い壁が奇妙に彼女の視覚に悪影響を与え始め、それが鉄格子のようにみえてきて、さらにその向こうに部屋を這い回る女たちのイメージが浮かんでくる。自分でこれが単なる妄想に過ぎないと思おうとするのだが、やがて譫妄状態へと進み意識が朦朧としてきて狂気に襲われるという不気味な物語である。

休息療法の典型的なものとして、ミッチェルが診た患者 S 夫人の例をみてみよう。1885 年 8 月にミッチェルはロンドン在住の 37 歳の富裕な家庭の婦人を診断・加療している。この S 夫人は、16 歳で神経症を発症している病歴があるのだが、その後回復して健康を取り戻した後に結婚する。結婚後 1 度流産をし、死産を 2 度ほど繰り返すが幸い、女の子を出産する。しかし、近親者の死が引き金になって神経症が再発する。失神を繰り返し、目がみえにくくなったり難聴になったりする。顔面が紅潮し、貧血や原因不明の子宮の不調、そして脊椎の痛みを訴え汽車に乗ることができない。ベッドに寝たきりになって神経性の興奮が強くなり、ベルの音、大声、体の接触などに敏感に反応するようになる。高い洗練された教養をもつこの女性は器官性の障害がないにもかかわらず、症状が進み痩せこけて黄色の顔色になってしまう。ミッチェルは彼女をロンドンから 200 マイル離れた田舎に隔離し、患者に有無をいわず強権的に指示を与える。誰にも合わせず、読み書きもさせず、ナースの看護と監視の下に一つ部屋に閉じ込めて、6 週間から 2 ヶ月このようなベッドで寝たきりの状態を続けさせる。マッサージを施し、電気治療と水治療を併用し、睡眠剤、栄養剤を与え、刺激による

興奮を避けて彼女の家庭のニュースすら伝えない。ミルク・ダイエットを行い動物性の脂肪を増加させ血色良く太らせる。この結果夫人は回復し夫と世界一周の旅行に出かけることができたという。(Bassuk による)

ビアードによって提唱された神経衰弱の概念は、早く、ドイツに渡り、19世紀末あたりにはイギリス、そしてヨーロッパ全土に広がっていく。これが日本にもはいつてくることになる。ミッチェルの休息療法も、漱石の『吾輩は猫である』刊行と同じ明治38年に出版された後藤省吾の『神経衰弱症』にみえる。「ワイルミツツエル氏」の「(肥満法) 滋養療法」と題された項目にあがっており、「安息就褥、職務の禁止、談話の禁止、精神および感情の安静、周囲より凡ての人を隔離すること、(患者の感情を刺激するもの) 読書を遠けること」と治療上の注意が記され、さらに、「牛乳は毎日一升乃至一升半合」を与えるとある。重篤な神経衰弱症に罹っていた三千代はこのような療法を受けたのだろうか、想像してみると面白い。神経衰弱は世界中でほぼ一様に類型化された症状や病態を生み出すだろうから、そこから作り出される新しいタイプの作中人物もある程度は似てくるかもしれない。ただ、漱石の三千代の場合は、やはり、漱石らしいひと捻りが付け加えられていることも見逃せない。もともとビアードの神経衰弱の概念は、新しいタイプの女性たちに特徴的に現れると考えられていたので、これが、「新しい女」と呼ばれる社会現象へと繋がっていく。

都市生活の複雑化や移動手段のスピードアップにともなって、外界の刺激の度合いが急速に高まっていき、そのために、敏感な神経がずたずたにされていくと考えられたのだから、男性よりも繊細な神経をもつとされた女性はより敏感になり、神経衰弱に罹りやすくなっていると思われたのであった。ことに女性の社会進出が盛んになってくると、家庭内の刺激よりも社会に出てからの圧力のほうがより強大になるだろうから、この「新しい女」たちは神経衰弱症と強いイメージの結びつきをもっていく。ビアードは、神経衰弱の要因を「蒸気力」、「定期的刊行物」、「電信」、「科学」などの文明推進力を支えてきたものを考えているが、最後に、「女性の精神活動」の変化を取り上げている。ギルマンも明らかにフェミニストとしての彼女の活動が神経衰弱の発症に影響を与えたと考えられたことだろう。

三千代はいわゆる「新しい女」とはみえない。むしろ、「古版の浮世絵に似ている」と形容されるように、どちらかといえば、伝統的な古風な女のイメージが強い。作中には森田草平の『煤煙』への言及があるが、これは平塚雷鳥のある意味では西欧的な「新しい女」の性格に対して異議を唱えて日本的な女の神経衰弱症患者を描きたかったからではなかったか。

参考文献

- 大谷是空「おおいそぎ」『浪花雑記』和田克司編 和泉書院 1999年.
- 江口重幸『シャルコー——力動精神医学と神経病学の歴史を遡る——』勉誠出版 2007年.
- 杉江薫著・呉秀三校閲『ヒステリー研究と其療法』島田文盛館 1915年.
- 仙葉豊「漱石の『木屑録』と海水浴」『テキストの地平』富山太佳夫他編 英宝社 2005年.
- 「神経衰弱とは何であったか——漱石・ピアード・ノルダウ——」『言語と文化の饗宴』仙葉豊他編 英宝社 2006年.
- 「ピアードと神経衰弱」『所報』第33号 関東学院大学人文科学研究所 2010年.
- 夏目漱石『それから』『漱石文学全注釈』8佐々木英昭注釈 若草書房 2000年.  
(ただし、引用は新潮文庫版による)
- ヘンリー・モーズレイ『精神病訳説』神戸文哉訳 1876年(2002年復刊 社会福祉法人「新樹会」創造出版)
- 渡会好一『明治の精神異説——神経病・神経衰弱・神がかり——』岩波書店 2003年.
- Bussuk, Ellen I. "The Rest Cure: Repetition or Revolution of Victorian Women's Conflicts?" in *Female Body in Western Culture: Contemporary Perspectives*. Ed. Susan Rubin Suleiman. Harvard U. P., 1986.
- Beard, George M. *American Nervousness: Its Causes and Consequences*. (1881) New York: Arno Press, 1972.
- Gilman, Charlotte Perkins. *The Yellow Wallpaper*. Ed. Dale M Bauer. Bedford/ST. Martin's, 1998.
- Marrijike Gijswijt-Hofstra and Roy Porter. *Cultures of Neurasthenis from Beard to the First World War*. Editions Rodopi, 2001.

# 翁久允研究の方向性について

そのコスモポリタニズムと複合アイデンティティをめぐって

須田 満

翁久允<sup>おきなきゆういん</sup>は、1909年にシアトル文学会設立を提唱し、1914年以降カリフォルニアにおいて移民地文芸論を展開した一世文学の中心的存在として知られている。1924年の移民法で排日運動が頂点に達するまでの、日本人移民が「出稼ぎ」から「定住」へ移行してゆく日本人移民史の第2期<sup>1</sup>の文学活動に焦点があてられてきた。帰国後「アサヒグラフ」や「週刊朝日」の編集に携わったジャーナリストとしての活動や新興芸術派の作家として存在は、意外と知られていない。朝日新聞を退社して、1931年5月に竹久夢二を伴って再渡米したが、日米新聞社の労働争議に巻き込まれ、ほぼ一年で帰国した。

1932年末から、翁はインドへゆき仏跡を周ってからは、山岳仏教や役行者、神社仏閣の研究に没頭していたのち、1936年9月、郷土研究誌「高志人」<sup>こしびと</sup>を創刊し、1973年2月に逝去するまで、37年間に338号発行した。

85年の人生を全うした翁の著作は膨大な数に上るが、「地方人・日本人・コスモポリタン」という複合アイデンティティを持った翁久允の特有の思想や活動が、今後更に注目されると思われる。

## 富山から東京へ

翁久允は、1888年富山県上新川郡大字六郎谷村<sup>かみにいかわ ろくろうだに</sup><sup>2</sup>（現在の中新川郡立山町六郎谷）に漢方医翁源指<sup>げんし</sup>の次男として誕生した。<sup>3</sup> 1902年、富山県立富山中学校<sup>4</sup>に入学

<sup>1</sup> イチオカ、ユウジ『一世 —黎明期アメリカ移民の物語り—』（刀水書房、1992年）、pp. 5-7

<sup>2</sup> 『東谷村史』（東谷村役場、1926年）によれば、翁久允の誕生時(1888年2月8日)の生地は、上新川郡大字六郎谷村である。1889年4月1日の市町村制施行により、六郎谷村は「東方谷多き十二箇村を割きて東谷村」に属し、1896年4月1日、群制の施行により、東谷村を含む3町21村が、中新川郡として発足した。

<sup>3</sup> 本稿の翁久允に関する伝記的記載は、逸見久美・須田満編集『翁久允年譜 1888-1973』（公益財団法人翁久允財団、1994-1995年）、『翁久允全集』（翁久允全集刊行会、1971-1973）によるが、その後の調査で誤記は都度訂正。

<sup>4</sup> 「翁久允年譜」（『翁久允全集』第十巻、pp. 455-472）では、富山県第一中学校としているのは誤記。同校は、1901年4月1日に富山県立富山中学校と校名が変更された。『富中富高百年史』（富

した翁は寄宿舎生活をおくっていたが、1905年1月舎監に反感を抱いた友人8人と悪戯心で「糞まき事件」を起こしたことが原因で、中学3年で放校処分となる。上京を決心して翁は、順天中学校に入学するが、交友関係は富山中学や高岡尋常中学を中退した「越中もん」に限られていた。そんな中に、近々渡米する金森八郎がいて「米国に行き、大いに働いて金を貯め、将来大実業家になるのだ」と語った。

同居の兄とは気性が合わず悶々とした日々を送っていた翁は、ある日ふと「そうだ、米国に行こう」と思いつき渡米を決意し、帰郷。渡航目的を「語学研修」で申請した旅券は無事発給され、1907年5月、「非移民」という三文字が捺された旅券を持ってシアトルへ旅立った。

## シアトルとブレマートン時代

シアトルに到着した翁は、中学の先輩吉山一幸の出迎えを受け、富山県人会の歓迎会も催された。到着翌日から、翁は日本人街の桂庵で紹介されたイチゴ摘みや家事労働、県人会紹介のエレベーター・ボーイなどの仕事を経験した。

1907年11月から1908年2月にかけて、日本人のアメリカ移民の制限協約である日米紳士協約が成立。排日感情の厳しいシアトルから逃れたい一心で、翁は軍港の街ブレマートンへ移り、また白人家庭で家事労働しながら小学校に入学して語学を習得し始めた。

シアトルには1906年に俳句の「沙港会」ができ、1908年末には「鏡花会」が設立された。1909年1月、シアトルの「旭新聞」の懸賞小説に六溪山人<sup>ろっけいさんじん</sup>6の名で応募した「別れた間」が二等に入選。以後「旭新聞」「北米時事」「大北日報」などに頻繁に執筆した。同年9月、ブレマートンに新設されたユニオン・ハイスクールに入学し、スクールボーイ生活をしながら執筆に励んだ。

1909年秋、「文学会設立に就て」が、「北米時事」に連載され、多くの翁六溪論が邦字新聞紙上に掲載された。当時のシアトル文壇は、日本の自然主義文学の影響を強く受け、日本語の空間の中で作品の価値が論議されていた。

---

山高等学校創立百周年記念事業講演会、1985)

<sup>5</sup> 渡航理由は外務省外交資料館「海外旅券下付表」によれば「語学研修」とある。佐々木敏二「翁久允の作品・論説と時代の影」（「立命館言語文化研究」5巻5・6合併号、1994年）、p. 62

<sup>6</sup> ペンネームの六溪は、翁の幼少の頃従兄菅田実順がつけたもの。生地の六郎谷とロッキー山脈の語呂合わせで、シアトル時代以降、六溪山人や翁六溪の筆名を使った。（『翁久允全集』第二巻、1972年）p. 94。俳句では生涯、六溪の号を使った。

<sup>7</sup> この当時のシアトルの新聞や雑誌で現存するものは極めて少なく、翁がスクラップブックに残した資料が貴重な存在となっている。ただし詩誌名や日付の未記入のものが多く、立命館大学「翁久允所蔵資料目録」で出典不明のもの調査を進めている。

1913年9月<sup>8</sup>から1914年2月まで、シアトル母国観光団の一員として一時帰国。この前後から「帝國文學」や郷里の「北陸タイムス」「富山日報」に寄稿するようになる。また郷里の石黒キヨと結婚し、帰米後翁は「旭新聞」に「筆を葬るの記」を發表し、一時は断筆を考えて、貿易商の古屋商会に勤務したこともあった。

## スタクトン・フローリン時代

1914年5月から6月<sup>9</sup>にかけて、シアトルからカリフォルニアへ南下。スタクトンからフローリンへ移住し、作家、ジャーナリストとして活躍するほか、スタクトン日本人会の書記として、農業従事者など200人以上の人々と話す機会を得て、日本人移民の一人として家庭生活をおくるべく自己を捉えるようになる。

1915年1月1日付「櫻府日報」に發表した「純移民地文藝の勃興」の中で、翁は「吾等の生活を根底にした藝術が現出されなくてはならぬ」と書き、移民地文学が「生活を根底にした藝術」である必要性を訴えた。また「私の狭き要求（二）——植民地文藝の使命——」<sup>10</sup>では、移民地に住む日本人が日本に住む日本人とは異なるアイデンティティを持ち、自らが置かれた状況に映した「花」、すなわち移民地文藝が必要であると提起している。

小説では、「日米」編集長・山中曲江の薦めで「悪の日影」を1915年6月から9月に百回<sup>11</sup>にわたりを連載し、移民地初の本格長編小説として話題となる。翌年4月から9月には長編第二作「紅き日の跡」を掲載し、翁の「移民地文藝」は実作面でも発展をみせた。当時のサンフランシスコ近郊には、松原木公、長沼重隆、明石順三、清澤洸らが在住し文壇的素地があり、彼らも一時滞在者の文学との差別化を図ろうとしていた。

1917年には、「移民地文芸と移民地の生活（一）～（七）」<sup>12</sup>で、翁は移民地文芸の新たな役割として、次世代へ文学を通じて「彼らの祖先が如何なる奮闘をしたか、また如何なる生活すなわち思想を営んでいたかを知らせねばならぬ」と論じた。

---

<sup>8</sup> 『翁久允年譜 1888-1973』では、1912年11月としているが誤記。

<sup>9</sup> 『翁久允年譜 1888-1973』では、1915年としているが誤記。

<sup>10</sup> 「日米」1915年11月28日

<sup>11</sup> 最終回には、第99回と記されているが、(九) (十六) (三十四) がダブリ、(十) (三十三) が抜けているので、全100回となる。1915年6月3日～7月6日、7月10日～8月4日、8月6日～8月21日、8月23日～9月16日。

<sup>12</sup> 「日米」1917年8月22日～24日、8月26日～29日の7回。

## オークランド時代

1918年7月、翁はフローリンを離れ、オークランドで日本人会幹事となるが一年弱で辞任。土着永住論の推進者である日米新聞社長・安孫子久太郎の要請で「日米」オークランド支社主任となり、文芸欄を担当し、小説中心の「金色の園」と詩歌・俳句中心の「銀彩の森」を立ち上げた。

1919年9月、翁は「移民地文藝の宣言」<sup>13</sup>の中で、「吾々の民族は永久にこの米大陸に不滅で」あり、「第二故郷創造の任に當る詩人として最初の文藝を創造」し「その祖先の一人としてその子孫の為に不滅の文藝品を遺傳する」と宣言している。

1923年7月、短編集『移植樹』をオークランドで出版。「著者の言葉」に「二十世紀の中葉を過ぎたら、私達は、私達の子弟の中から世界的な言葉——英語をもつて物語を書く人々を得るであらう。彼らの時代が来るまでに私達は中繼として、日本民族の傳統の下に、他國で受けた神経の痛々しさを告白して行くのである。」<sup>14</sup>と語っている。

1924年3月24日、翁は父の病氣を見舞う為に、妻と長男を伴って米国にいずれ戻るつもりで、帰国の途についたが、船中で妻の妊娠を知った。時まさに、新移民法が下院で審議され始めた時期であり、同年7月1日に移民法は発効した。妻と長男は、翁と一緒に米国に再入国することはできるが、新たに生まれる子供は入国できないという運命となった。

## 翁久允研究のながれ

瀬沼茂樹の「翁久允『移民地文芸』」<sup>15</sup>は、1962年に発表された翁研究の最初期のもので、「高志人」に連載された「わが一生」<sup>16</sup>をもとに書かれ、「移民文学」として長沼重隆、石垣榮太郎、前田河廣一郎、谷讓二とともに紹介している。翁研究の基礎資料である『翁久允全集』(1971-1974)をベースにした評伝としては、逸見久美<sup>17</sup>や稗田董平<sup>18</sup>がある。作家活動を追ったものとしては、1974年太田三郎が、翁を「外

<sup>13</sup> 「日米」1919年9月29日、4面、署名R・K・Oは、Rokay Kyuin Okinaの頭文字

<sup>14</sup> 翁久允「追憶」、『移植樹』(オークランド、移植樹社、1923年)、p. 16

<sup>15</sup> 「十四 移民文学」『日本文学 世界周遊紀行 1 アメリカ篇』(角川書店、1962年)、pp. 345-371

<sup>16</sup> 「海のかなた」(「高志人」1954年11月～1958年1月)、「金色の園」(同1958年2月～1961年11月)

<sup>17</sup> 『わが父翁久允』(オリジン出版センター、1978年)、『翁久允と移民社会』(勉誠出版、2002年)

<sup>18</sup> 『筆魂・翁久允の生涯』(桂書房、1994年)



国における日本人移住者の社会で行われた文学活動」<sup>19</sup>の範疇で位置づけ、「在米日本人という特殊な立場から生まれるコスモポリタンの意識をもって創作すべき」と訴えた作家と評価した。Kazuyo Yamane<sup>20</sup>、藤沢全<sup>21</sup>、篠田左多江<sup>22</sup>は、少数民族としての日系人や排日運動の中での日系アメリカ文学者として翁を捉え、富永秀子<sup>23</sup>は、翁を新興芸術派のひとりとして移民文学やルンペン文学の観点で論じた。また桑井輝子<sup>24</sup>は、長編『悪の日影』から『道なき道』<sup>25</sup>の中でのモデルとして表れる翁のシアトル時代からカリフォルニア時代へのアイデンティティの変容を捉えている。

1994年、翁が自宅に残した資料は山本岩夫を中心に整理され、「翁久允所蔵資料目録」としてまとめられ、佐々木敏二、中郷芙美子、桧原美恵らが新資料に基づく論考<sup>26</sup>を発表した。1998年、佐伯彰一は翁の日本への帰国・郷里での活動を「エグザイルの帰還」<sup>27</sup>と評し、八木光昭は、「明治四十年八月二十日 在米日記帳」<sup>28</sup>の翻刻によりシアトル到着直後の翁の生活ぶりを明らかにした。

最近の10年間では、日比嘉高<sup>29</sup>は、一世文学作品に頻出にする日本の自然主義文壇に由来する表現に着目して、一世のアイデンティティの二重構造を指摘。Kristina S. Vassil<sup>30</sup>は、トランスナショナリズム視点で「航海雑感と船中印象」<sup>31</sup>を読解し、故郷と国籍のとまどいの中で翁はコスポリタンというIDを選択したと解釈する。また水野真理子<sup>32</sup>は、翁が「日米」に執筆した全容を把握した上で、『富山日報』へ寄

<sup>19</sup> 「外国における日本人の文学活動」(「学苑」、1974年12月)、pp. 2-26

<sup>20</sup> “Japanese-American Literature”(「比較文学」、1978年12月、pp. i-xxiv)、“Kyu-in Okina’s Contribution to Japanese -American Literature Early in the 20<sup>th</sup> Century”(「新英米文学研究」、1989年3月)、pp. 2-7

<sup>21</sup> 『日系文学の研究』(大学教育社、1985年)

<sup>22</sup> 「日系文学のパイオニアたち——一世文学の誕生」(『アジア系アメリカ文学を学ぶ人のために』、世界思想社、2011年)

<sup>23</sup> 「翁久允」(「芸術至上主義文芸」1981年11月)、pp. 67-71

<sup>24</sup> 「在米日本人「移民地文芸」覚書(1)アメリカの「亡者」-翁久允の長編二部作「悪の日影」と『道なき道』」(「白百合女子大学研究紀要」41号、2005年)、pp. 117-134

<sup>25</sup> 『道なき道』(甲子社書房、1928)、「紅き日の跡」を帰国後加筆して上梓。

<sup>26</sup> 「特集 翁久允と移民地」(「立命館言語文化研究」5巻5・6合併号、1994年2月)

<sup>27</sup> 「思い出のなかの翁さん——「エグザイルに帰還」日本型」(「とやま文学」第16号、1998年3月)、pp. 125-130

<sup>28</sup> 「翁久允の日記——「在米日記」翻刻にあたって——」(「とやま文学」第16号、1998年3月)、pp. 174-200

<sup>29</sup> 「移植樹のダンス——翁久允と「移民地文芸」論」(『ジャパニーズ・アメリカ』、新曜社、2014)、pp. 242-262

<sup>30</sup> “Passages: Writing Diasporic Identity in the Literature of Early Twentieth-Century Japanese America”, A dissertation submitted in partial fulfillment of the requirements for the degree of Doctor of Philosophy (Asian Languages and Cultures) in The University of Michigan, 2011

<sup>31</sup> 翁久允『コスモポリタンは語る』(聚英閣、1928年)、pp. 189-201

<sup>32</sup> 『日系アメリカ人の文学活動の歴史的へ変遷』(風間書房、2013年)、pp. 67-156

稿した「田舎モンとして悟りきらぬ日本人」<sup>33</sup>に注目し、「世界人」の概念を日本の一地方都市を出発点にしている特徴を指摘している。

## おわりに

鶴見俊輔は、亀井俊介との対談の中で翁のことを「コスモポリタニズムとローカリズムを楕円の二つの中心として自分の中において生きた人だ」と指摘し、「地域主義的であって同時に世界大の視野を持つという生き方」をした翁を「未来の人だ」<sup>34</sup>としている。

最晩年の翁は、「米化しても米土にある差別思想を消すことができない [...] それと戦っても勝つことができない。そこで観念的なコスモポリタンになろうと、私は念じた」<sup>35</sup>と在米時代を振り返っている。

翁久允は、郷土研究誌として出発した「高志人」を通じて富山という地域コミュニティのみならず、在米・在京時代の友人たちとの交流空間を持ち続けた。自叙伝である『わが一生』の中には、在米時代の作品に描ききれなかった想いが綴られ、旧友たちも筆をとった。「高志人」の存在なしでは、『翁久允全集』の刊行もなかったろうし、「移民地文藝」論が顧みられることなく、忘れ去られてしまったかもしれない。1924年の帰国から天寿を全うするまでの約半世紀の翁久允の活動に、今後、研究のスポットが当たることを期待する。

---

<sup>33</sup> 翁久允「米国よりの感想（其十二）」（「富山日報」、1924年1月14日）、3面

<sup>34</sup> 鶴見俊輔/亀井俊介『アメリカ』（文藝春秋、1980年）、pp. 107-108

<sup>35</sup> 「あとがき」（『翁久允全集』第三巻、1972年）、pp. 400-422

## ヘンリー・ジェームズの『使者たち』における 創作手法と欧米文化の衝突について

秋山 正幸

### 1. 創作手法について

ヘンリー・ジェームズ (1843-1916) の『使者たち』(1903) は、アメリカとヨーロッパの関係を描いた国際小説である。ジェームズは「制限的視点」という創作手法を用いてこの作品を書いている。これは作中人物の一人の視点をとおして、他の人物の行動や内面的世界を読者に伝える方法である。

アイラ・グーデイは『カナディアン・フォーラム』(1970) の書評欄<sup>1</sup>で、『山の音』の主人公信吾は、道徳的尊厳を守ろうとしている点において、ジェームズの『使者たち』の主人公ストレーザーに類似していると述べている。そのうえ、両作品は創作手法についても共通している、と指摘している。

この書評に刺激を受けて、私は『使者たち』と『山の音』の主題や創作手法について比較研究してみようと思った。その時、比較文学は外国文学の影響の研究であり、材源・影響関係が実証されなければ、学問として認められないのではないかと、という難問題に直面したのである。しかし、材源・影響の関係だけに焦点を絞ってしまうと、比較文学は発展していかないのではないかと思うようになった。その頃、亀井俊介編『現代比較文学の展望』(1972) 中の A・O・オールドリッジ氏と亀井俊介氏の対談「比較文学の問題と展望」を読む機会に恵まれたのである。その中で、オールドリッジ氏は、比較文学の概念を広めるために、「必ずしも材源・影響関係の事実を証明できなくても、二つ以上の文学作品の『対比』(rapprochement)をしていいんじゃないか」(196) という意見を述べ、さらに「東洋と西洋の幅広い研究にのり出す時期じゃないか」(206) と次世代の研究者に大きな期待を寄せているのである。

1975年に半年間、私はイリノイ大学のオールドリッジ教授の指導を受けて、「川端康成の『山の音』とヘンリー・ジェームズの『使者たち』の対比研究」と題する英語の論文を仕上げた。帰国後、この論文を勤務先の日本大学文理学部(三島)の『研究年報』(1977)に掲載することができた。しかし、私はこの対比研究を日本の比較文学者たちが比較文学として認めてくれるかどうか不安に思っていた。数カ月後、アメリ

カ東海岸の大学教授が、ある学術誌に私の論文について理解あるコメントを寄せた。そのことを知って、私は意を強くし、比較文学の研究に没頭するようになった。1991年、『ヘンリー・ジェイムズと日本の主要作家たちとの比較研究』と題する英文の著書を世に出した。その中に最初の対比研究の論文が含まれていた。この著書について、『日本大学国際関係学部図書館ニュース』の書評欄で千栄子ムルハーン教授は次のような意見を述べている。

川端康成の『山の音』とヘンリー・ジェイムズの *The Ambassadors* の対比分析(第一章)について私が知ったのは、米国でも理論派で名を成した比較文学者 J・ウォーカーの文学批評論に、秋山氏の論文が大きく引用されていたからだ。

Rapprochement とは手法的には parallel study の対比だが、仏語の意味では(国家間の)友好関係の樹立ということで、まさに国際化時代の比較文学に必要なスタンスである。(6)

上記の書評において、ムルハーン教授は対比較研究の必要性を認めている。さらにまた、スタンリ・ワイントラウブ教授は、アメリカの雑誌『比較文学研究』(1993)の書評欄<sup>2</sup>で、同書の対比研究の意義を認めているのだ。おおよそ、この時期に、国内外で、対比研究が比較文学として認められたと考えることができるだろう。

## 2. 『使者たち』における欧米文化の衝突について

次に『使者たち』を考察するにあたり、その作品の背景となっている19世紀中葉から20世紀初頭におけるアメリカとヨーロッパの関係について概観しておきたい。アメリカは、フロンティア精神によって、自分の能力を自由に発揮することができるという考えをもった人たちで成り立っている社会であった。一方、ヨーロッパは、貴族社会を頂点として、光輝ある伝統文化と優雅な行儀作法を保っている社会であった。このように、アメリカとヨーロッパの文化は質的に異なっていたのである。

これから、主人公ランバート・ストレザーの視点から語られる彼の知的冒険の物語を考察したいと思う。

55歳になるアメリカ人、ストレザーは、ニューイングランドのウレットで工場を経営している未亡人ニューサム夫人の使者として、彼女の息子チャドを交際中の得体の知れない女性と別れさせるために、3月下旬にイギリスのチェスターに立ち寄り、その後、パリに到着する。ストレザーはチェスターで旅行案内人のマライア・ゴストリー嬢に会い、彼女からヨーロッパ人の考え方を学ぶ。

ゴストリー嬢との対話において、ストレザーは自分の来歴のこと——つまり、彼は

若くして妻を失い、孤独な灰色の生活を送ってきたが、その後、ニューサム夫人の援助で評論雑誌の編集をしていることを述べる。さらにチャドをアメリカに連れ戻すことが自分の役目だと語る。この物語の中で、ゴストリー嬢は終始ストレザーの相談相手となり、彼に協力を惜しまない。

次にストレザーはヨーロッパ旅行中のウェイマーシにチェスターで会う。彼はピューリタンの価値観を重視するアメリカの弁護士である。ニューサム夫人が後に第二の使者たちを派遣したのはウェイマーシの意向によるものと考えられる。

パリに到着してから、ストレザーはチャドの住居を訪れ、留守番をしているリトル・ビラムに会う。多くの美術品で飾られている部屋を見て、ストレザーはチャドが立派な青年になっているだろうと想像する。

その後、ストレザーは、フランス座でチャドに会い、彼が洗練された紳士になっていることに気が付く。観劇後、ストレザーは使者としての役目をチャドに伝える。

チャドの計らいで、ストレザーはグロリアーニの園遊会に招待される。そこで有名な劇作家や批評家に会い、ヨーロッパの伝統文化に魅了され、自分の不満足な過去の生活を顧みて、ストレザーはリトル・ビラムに次のように語る。

人には自由の幻影がある。それ故に、私のように、その自由の幻影の思い出もない者になってはいけない。(中略) いま言っているように、君は非常に幸運にもいままいいくらい若い。とにかく、愚かにも人生の大事なものを捉えそこねてはいけない。(中略) 君の好きなことを何でもやりたまえ。私は失敗だったからね。生きたまえ！ (1:218)

ストレザーは、人生の好機を逸することなく力強く生きよ、と心を込めてリトル・ビラムを励ましているのである。

グロリアーニの庭園でヴィオネ伯爵夫人に会い、ストレザーは彼女の高貴な美しさに圧倒される。

その後、彼女の住居を訪れて彼女と話し合っているうちに、チャドがヴィオネ夫人の影響で洗練された紳士になったのだと実感する。そして彼は、円形浮き彫りや魅力的な絵画などのある美的雰囲気のある室内で、彼女の悩みを聞き、彼女の力になりたいと述べる。この時点で、彼はヨーロッパの伝統文化の美の象徴とも言える彼女のよき理解者となるのである。

ストレザーはチャドと伯爵夫人が道徳的に清らかな関係であることをリトル・ビラムに確認する。その結果、ストレザーは二人の結婚が望ましいと思うようになる。彼は彼女と食事を共にした時に、彼女を苦境から救い出し、彼女とチャドの結婚を祝おうと決心する。

そのような折に、ストレザーはアメリカのニューサム夫人から、早く帰国せよとい

う電報を受け取るのである。チャドはアメリカに帰ると言い出す。彼はアメリカで、新時代にふさわしい科学的な方法で広告の仕事をしたいのである。しかし、ストレザーは、チャドがパリに留まることを強く望む。ここで二人の立場が完全に逆転するのだ。

ストレザーは、二人に自分の身代わりとなって人生を謳歌してもらいたいのだ。つまり、灰色の人生を送ってきた彼は、自分の夢を二人に託したいと念願しているのである。そのことは、彼がゴストリー嬢に向かって、

「重要なことは、あの二人が私のものだということです。そうです、彼らは私の青春なのです。(中略) もし彼らが私の期待を裏切れば、私の青春はすべて消え去ってしまう」(2:51)

と告白していることから明らかである。

その後、ニューサム夫人は、娘のセアラ、彼女の夫ジム、彼の妹メイミーの三人からなる第二の使者たちを差し向ける。セアラはストレザーに24時間以内に使者としての任務を果たしてほしいと強硬に主張する。その時、彼はニューサム夫人の道徳的圧力を感じ取る。ジェイムズはストレザーの胸中を次のように描写している。

彼が直接ニューサム夫人を相手にしている感じがしたとは言えないかもしれないが、確かに夫人が彼を直接相手にしているかの如くに感じたのだ。(2:198)

セアラはニューイングランドのウレットの価値基準でストレザーに話をしているので、彼がヨーロッパ的な価値基準で応答しても話がかみ合わないのである。ストレザーが、チャドの交際相手のヴィオネ伯爵夫人は素晴らしい女性だと言っても、セアラはそんな彼に一切耳を傾けないのだ。彼女はヨーロッパの価値よりもウレットの価値を上位におく態度を保持しているといえよう。まさに欧米文化の衝突である。

その後、ストレザーは気分転換をはかるために、遠い昔、ボストンの画廊で彼の心を惹き付けたランビネの絵を思い出させてくれるような風景を見ようとして、パリ郊外のセヌ川のほとりを訪れる。そこでランビネの絵の構図とそっくりな光景を目にする。驚いたことには、川に浮かべたボートにチャドとヴィオネ伯爵夫人が乗っていたのだ。この周辺は若いカップルが一夜を過ごすところとして知られている。ストレザーが頭に描いていた清らかな恋愛と結婚という図式は一瞬にして崩れ去ってしまう。ストレザーは落胆するが、気を取り直しヴィオネ伯爵夫人をヨーロッパ文化の象徴として擁護しようとする。

ストレザーはパリに滞在中、アメリカの生活に欠けているヨーロッパの伝統文化の美を探求し、それを自分の精神的な糧として再出発しようとするのである。

以上、ストレーザーと彼をとりまく登場人物を考察し、彼がどのようにしてヨーロッパ的価値観をもつようになったかについて明らかにしてきた。そして、彼がニューイングランドのピューリタリズムの価値観をもつセアラと対立するに至った経緯、つまり広く考えれば欧米文化の衝突の実情を考察してきた。

ここで『使者たち』について、要点をまとめておきたい。これまで主人公ストレーザーの精神構造を精査してきたが、彼は使者としてどのような責任を取ったのだろうか。

ストレーザーは目先の世間的な実利を考えるとなく、美的価値を人間的価値として生きるために、職を失うことを覚悟して、ニューサム夫人との再婚をあきらめる。彼に好意を寄せているコズトリー嬢との交際も断念する。ヨーロッパに留まってほしいというヴィオネ伯爵夫人の切なる願いも断る。チャドの帰国についても彼の意志に任せる。

ストレーザーはピューリタンの道徳基準によって最終判断をしたと思われる。彼の審美的な価値観の中には、良心、正義、公平、独立心を擁護しようとするピューリタンの精神が底流となって存在しているのである。これは作者ジェームズの精神に相通じるものであるといえよう。

『使者たち』の舞台背景は19世紀であり、この時代にはアメリカ人はヨーロッパ人に憧れると同時に対峙するという両面感情を抱いていた。20世紀になると、アメリカは自国を含むヨーロッパを西欧と見なすようになり、実際にその指導的な役割を担うようになってきたのである。それ故に、われわれは、ジェームズの小説を時代の流れの中で読み解くことが大切であると思う。

## 注

- 1 Ila Goody. rev. of *The Sound of the Mountain*, by Yasunari Kawabata, *The Canadian Forum* 50 (1970): 219-20. Print.
- 2 Stanley Weintraub. rev. of *A Comparative Study of Henry James and Major Japanese Writers*, by Masayuki Akiyama, *Comparative Literature Studies*, 30, No.2 (1993): 227-30. Print.

## 引用文献

James, Henry. *The Ambassadors*, 2 vols. New York: Charles Scribner's Sons, 1937, Print.

亀井俊介編『現代比較文学の展望』研究社、1972年。

ムルハーン千栄子書評、秋山正幸著 *A Comparative Study of Henry James and Major Japanese Writers*. 『日本大学国際関係学部図書館ニュース』112号、1991年。

## 参考文献

秋山正幸『ヘンリー・ジェームズの国際小説研究—異文化の遭遇と相剋』南雲堂、1993

年。  
ハンチントン、サミュエル、鈴木主税訳『文明の衝突』集英社、1998年。

---



## 《3月特別企画》

### 作家芹沢光治良の肖像——父と暮らした日々」

岡 玲子

私は芹沢光治良の4女で、戦後の父について発表させていただきます。

戦後、私達6人家族の生活は、戦争前とすっかり変わりました。それまでは、母によりますと、父は大変な潔癖家で気難しい人であったようです。

飢えに耐えて、家族全員が軽井沢の疎開生活を終え東京へ帰ってきましたのは、1946年の冬でした。父が苦勞して探した世田谷区三宿383に小さい家を借りました。この家で、私が小学校一年から高校卒業までの十二年間を過ごしました。

この十二年間、父の活躍は凄かったです。しかし、父を中心にした家族の絆も本当に素晴らしかったです。父に原稿の依頼が次々とあって、父はどんな依頼でも「書きましょう」と答えていましたが、いざ原稿しめきり日になると、雑誌社の方が玄関で待って、父が2階で原稿を書いていたことも度々でした。母は父の本が出版されるごとに、検印押しの作業を夜中までしていました。そんな中、父も母も訪ねて来られる方々と、狭い家の細やかな食糧でもご一緒するようにしていました。父は家族の話をよく聞いてくれ、父も私達になんでも話してくれました。一方、機会があると、散歩に、音楽会に、展覧会へと連れて行ってくれました。

父は教育にとっても熱心で、私のかよう、近所の小学校のPTAの会長を6年間務めました。父は焼け跡に校舎を建ててもらった陳情役を上手にやるばかりでなく、若い先生方に、これからの教育について率直に話していました。私家には、しばしば、小学校の若い先生方が集まってきていました。一方、子供たちにも大きな夢と希望を持って、心が広く開けるようにと願っていました。1951年、戦後初めて父が世界ペンクラブ大会に参加できた時、子供たちの絵を、ヨーロッパの子供たちに見せて、ヨーロッパの子供たちの絵を持ち帰りたいと願って実行しました。私も、心がおどるように夢中に1枚の絵を描いたことを懐かしく思い出します。私達の絵は、ローマ法王に献上してくれました。そして、父はローマ法王からの子供達に祝福のメダルを、小学校へもち帰ってくれました。(このメダルは現在沼津市芹沢光治良記念館にあります)私の中学校選びも、ピアノの先生選びも、父が決めました。中学、高校の父母会も、毎回父が出席していました。父は望まれるままご父兄の方々と楽しく会話をしていたようです。同級生が、今でもその当時のことを、「母が父母会でお父様のお話をうかがえ

るのを楽しみにしていました」と申されます。

この12年間のうちに、二人の姉が結婚しました。そして、一人の姉は声楽の勉強にフランスへ行き、またたく内に三人家族になりました。まもなく、父はゼンソク、気管支ゼンソクの発作におそわれるようになりました。発作が起こると、父の苦しい息使いが、狭い我が家の隅々までも聞こえ、咳が始まると、家が震えるようでした。父はどうすることもできないで我慢するのですが、我慢しきれなくなると、母に息ができるように背中を擦ってもらいました。母は、心をこめて、ゆっくりと指を縦にしたり、横にしたりして擦るのです。擦っているうちに、いつも発作が静まりホット胸をなでおろしました。発作がしずまってやれやれすると、その時の父の判断によって、お医者さんにきてもらい、注射をしてもらうこともありました。この光景は、父の本心が二つみえた気がします。それは、肉体的な苦しみも先ず我慢する父と、母に頼っている父の姿です。

父は61才の時、戦前暮らした東中野の焼け跡に家を建てました。祖父母の思い出の場所に戻れた母の喜びは大きく、その嬉しさは母の動作の一つ一つに表れていました。この年に、私はフランスに留学させてもらいました。それは、日本で初めての世界ペンクラブの大会が、開催された年でした。父は日本ペンクラブの副会長でしたが、フランス語圏、特にフランスからの参加者、友人と忘れられない意見交換を沢山したと思います。すでに、父の作品『巴里に死す』『サムライの末裔』が翻訳されて、ロベール・ラフォン社から出版されていました。その時、訳されたフランス語を整えられたアルマン・ピエラールさんも、この世界ペン大会に参加しました。そして我家に滞在されました。私は帰国されるピエラールさんと一緒にフランスへ旅立ちました。父は飛行機のタラップの下で見送ってくれましたが、不思議にも父の姿が大変大きく見えました。

それから7年間、その大部分の時間をピアノの練習に明け暮れて、パリで過ごしました。初めの3年間は、先に留学していた文子姉の後にくっついて生きていたようなものです。

父は毎週手紙をくれました。私も毎週書きました。父は、とても細かに父母の生活の様子、日本社会での出来事をはじめ様々な事柄を具体的に書き送ってくれました。この手紙は、私にとって両親と母国とのありがたい絆の糸でした。父の手紙を読むことで、いくつもの特別な父の生活方法や、面白い性格を知って、微笑んだこともたびたびありました。父が書いている作品を、書き終えたときは、たいていその作品への自らの賛辞、出版された時は、お読み下さった方々のお褒めの言葉、何か品物を買ったときはその値段、お客さまを、家でおもてなしをした時は、その時のおもてなしメニュー、孫にお小遣いをあげるのに、小さいお札を集めて封筒にいれると、孫がいつ

そう満足する様子……という手紙でした。その反面、私達の手紙が待っている日に届かないと、郵便局に問い合わせるほどで、私達に規則的に手紙を書くようにうながしました。遠くに離れていても、教えられることの多い手紙でした。手元に残っている僅かな手紙を読みますと、当時の日本を再び知ることも出来ます。

姉と私がパリに住んでおりました時、父は2回ヨーロッパにまいりました。1回目は、フランクフルトで開催された世界ペンクラブ大会の参加でした。2回目は、ソビエトロシア作家同盟のご招待でロシアを旅行した帰りでした。

最初の時は、フランスペンクラブの御招待で、パリのシャンゼリゼ通りに近い、フランスペンの家にお世話になりました。私達はフランスペンの家から、地下鉄で2駅離れた古いプロテスタントの女子寮の寮生でした。寮生には幾つかのルールを守る必要がありました。その一つに、父親でも男性は建物の外で別れることでした。私達の部屋や寮の食堂を見られないことを父は残念そうにしていました。

フランスペンクラブの会員の方々が、私達をよくご家庭にお招き下さいました。父は毎回何か話題を用意していました。フランス人同士が早口に会話を楽しんでいる中に、大変たくみにとけこんで、自分の用意した話題を話すのがとても上手でした。その中で、父が島崎藤村について力を込めてゆっくりと話していたことを懐かしく思い出します。その時、フランスの方々は「ムッシュセリザワは、日本の魂をもっている」と言われました。2回目の訪問時の父の話題は、ロシア旅行で、父がユーモアたっぷり話すので「娘たちよりフランス語のこまかいところまでムッシュセリザワはわかっている」と褒められて、機嫌をよくしていました。

父は、いつ、どこで、調べたのかパリに存在するバルザック像について、大変くわしく、姉と私を連れて行って色々バルザックとその場所を説明してくれました。最初の訪問の時に、日本へ帰る前日に父が行きたい場所として選んだのは、ロダン美術館でした。さらにロダン美術館でも、美術館の別棟のアトリエで、ロダンがバルザック像の制作に色々手をかけた未完の幾つもの作家バルザックを見ることでした。

フランスから戻ってきて、両親と姉と4人で暮らした4年ちかくの日々は、思い出深い毎日でした。この時代に、父は日本ペンクラブ会長に選ばれたり、大河小説『人間の運命』を書き上げたり、日本芸術院賞を受賞したり、日本芸術院会員に選ばれたり、故郷には、現在の沼津市芹沢光治良記念館である文学館が開館されたりした時期でした。

このひとつひとつの出来事を、父は喜んでいました。

その反面、長く心の病で療養生活をしていた長女の事や、音楽も文学も一生精進しなければならぬと思っけていても、二人の娘が、音楽を教え、練習にあけくれている様子をそばで見ている考える事が沢山あったようでした。一方、父はみずからの体

力のおとろえを受け止めざるおえなくなっていました。

この時期に、長いお付き合いのあった女流作家の阿部光子さんと牧師さんの定期的な聖書勉強会を家でしたり、有島武郎の姪でいらっしゃる有島暁子様と上智大学の神父様方との交流もありました。ところが、ある朝、父は大変元気な顔で機嫌よく、夢に赤い着物を着たお婆さんがでてきて、「何にもミツジロウさん心配しないように」と、言ってきていったと、父がおかしなことを言いました。それから、父はたびたび夢にでてくるお婆さんの話をするようになりました。

1970年はきっと父の喜びの年だったと思います。すでに触れましたが、故郷の沼津市我入道に現在は沼津市芹沢光治良記念館として、多くの芹沢文学愛読者の心の故郷になっています個人文学館が、スルガ銀行岡野喜一郎様のご尽力で、菊竹清訓氏設計のヨーロッパ調の教会のようなお城のような芹沢文学館が出来上がりました。生きている作家の文学館として初めての文学館でした。父は大変恐縮してしっかりと「ありがとうございます」をかみしめていました。そして、この文学館のおかげで、父が詩で唱えていますように「われ、本籍ここにあり」の我入道へしばしば行くようになりました。父にとって心からの喜びだったと思います。そして、この年に日本芸術院の会員にもなりました。父は、心友アンドレ・シャンソン氏が、フランスのアカデミシアンになられた時と同じような感慨深い喜びの心境でした。そして、この年に私は結婚しました。

父は私達の住む韓国ソウルに1972年に開催を予定している日本文化研究国際会議への出席要請のため来ました。韓国ペンの方々から父は大変な歓迎を頂戴しました。私達にとっては信じられない歓待でした。主人と二人で街を歩いていると「日本人の男性と韓国の女性」に間違えられて、まだ非難の野次が聞こえたそんな時代であったからです。父も「もっと早く韓国へ来たかった」と呟くほど、韓国の作家の方々、詩人の方々、音楽家の方々と心からの交流をしました。文学は素晴らしいとしみじみ感じました。

私の旦那がジュネーブの国連軍縮代表部に在勤していた時、父は78才になっていましたが、ジュネーブへ来ました。パリで乗り換えがあるので、パリまで迎えにいくつもりでしたが、父は、ファーストクラスで行くから心配がないとひとりできました。ところが、出来上がったばかりのシャルル・ドゴール空港での乗り継ぎは、大変だったようで、外国でこころぼそい思いを初めてしたと何度も言っていました。ジュネーブの生活を毎日、「夢のようだ！夢のようだ！」と言って、どうみても60才台の若い様子の父でした。午前中は原稿を書き、午後はよく孫と散歩して、近くのスイスのご老人や子供たちと会話をしていました。近所の人「ヨーロッパのおじいさんと日本人

形」とふたりを呼んでジュネーブ市民にしてくれました。父にとってこの散歩は、至福なひとときであったと思います。父はジャンジャック・ルソーに関する参考書を沢山持参して、ルソーについて新しい発見があると話してくれました。父にとってはまさしく大きな休暇で、

3カ月の間、私達が自由であると週末ジュネーブ近辺へ出かけたり、週末旅行をしたりで、父にとって懐かしい場所へも行くことが出来ました。私にとってもまたとない素晴らしい日々でした。

私達の東京住まいはいつでも父の家でした。父はいつも、亡くなる日も、長年続けた毎日と変わることがありませんでした。ただ母が亡くなってからは、家庭での父は少し変わりました。それは、父がとても消極的になったことです。

3年過ぎてから、父は生まれ変わったかのように「神シリーズ」と呼ばれる全8冊になる作品を書き出版されました。最後の『天の調べ』だけは亡くなった後の出版となりました。私はこの最後の作品を何か父の力が抜けた美しい作品に感じます。それは、きっと生涯心から深く、父の小説に登場する「お婆さん」「播州の親様」を信じておりました母からの天の調べが聞こえて、その調べを聞きつつ幸せに最後の作品を書いたことではないでしょうか、最後の作品を娘としてとてもありがたく思います。

## 《第 52 回東京大会シンポジウム記録》

### 第一次世界大戦と日本モダニティの変容

(2014 年 10 月 11 日、二松学舎大学)

**司会・講師：井上健（日本大学）**

**講師：西岡あかね（東京外国語大学）**

**エリス俊子（東京大学）**

**林淑美（立教大学）**

**ディスカッサント：椎名正博（日本大学）**

#### [シンポジウム要旨]

言うまでもないことながら、1910 年代後期から 20 年代にかけての日本文化を、第一次大戦およびその「戦後」と切り離した次元で語ることはそもそも不可能である。第一次世界大戦勃発に伴う大戦景気の到来は、近代日本の産業構造を一新するとともに、都市に基盤を置く新たな中間的階層と、固有の文化・生活様式を生み出した。長期化した戦争はその渦中においてすでに、日本の政治的・知的指導者層に、大戦をいかに言説化し、意味付与するかという課題を突きつけた。さらに、第一次大戦後の「帝国」日本は、国際新秩序の現実に向き合いつつ、ナショナルな志向を国際化していかざるをえなかったのである。島崎藤村のように開戦時のパリに滞在した文学者もいたし、1920 年代ドイツに留学した、三木清、阿部次郎、安倍能成、九鬼周造、和辻哲郎、村山知義ら知識人・作家の体感した「第一次大戦後」は、帰国後の彼等の文業や言論活動に確かな影を落としてもいるだろう。

だが、第一次世界大戦を「天祐」（井上馨）と見なし、もっぱら経済的、重工業的、軍事的、植民地的展開の契機となした日本は、ヨーロッパのような戦後（アプレゲール）意識とはほぼ無縁の地平にあったと言ってよい。この時期の日本文化はまた、第一次大戦に「参加」し、大戦後のパリに芸術巡礼をした、1920 年代アメリカの若き文学者たちが抱いたような、近代文明とその行く末に対する幻滅や虚無感を、ただちに共有することもなかった。

第一次大戦の衝撃は、大戦の当事国の芸術家の生と作品に根深い傷痕を残したにとど

まらず、ヨーロッパ伝統文化の自明性と正統性を喪失させました。それは結果として、アメリカとソ連の文化的台頭を招来することにもなった。戦後の文学・芸術においては総じて、新即物主義運動に典型的なように、作品の基底から抽象的観念や人間的意味を徹底して排除していかんとする流れが、具体的なものや事実即して、世界を形式化・即物化していかんとする動向が顕著となる。だがその一方で、20年代小説においては、解体され断片化された世界をつなぎ合わせて、全体と統一を再生せんとする道もまた模索されたのである。それはまた、ヨーロッパ文学・文化の再定義・再構築の試みと裏表をなす営為でもあった。

第一次大戦後西欧の文学・芸術は、「戦後」日本にいつ、いかようにして、もたらされたのか。ドイツ表現主義映画の代表作『カリガリ博士』（1919）が日本公開され、谷崎潤一郎、佐藤春夫など大正文学の旗手たちが、すぐさまそれに熱い論評を加えるのは1921年のことである。同年には、バルビュスの小説『クラルテ』（1919）および同名の雑誌に由来するクラルテ運動の影響下、小牧近江を中心に文芸誌『種蒔く人』が創刊される（小説『クラルテ』邦訳刊行は1923年）。こうした同時代的反応の事例は多々あれど、第一次大戦後文化の波動が日本にその実体的な作用を及ぼすに際しては、一定の時間の経過を必要とした。大戦経験という相の下で見ていくべき文化的所産が、新たなる文学・芸術の試みや方向性として、「戦後」日本のモダニティの在り方を大きく変容させていくのは、震災復興を経た1920年代も終わりにさしかかろうとする、世界恐慌、満州事変を間近に控えた、危機前夜とも言える時代のことではなかっただろうか。

「異国の戦争」（小牧近江の同名の書は1930年刊行）の表象が、翻訳小説という形をとって紹介されるのは、大戦終結から11年後の1929年10月のことである。第一次大戦に従軍したレマルクによる『西部戦線異状なし』の訳書は（秦豊吉訳）、1929年10月、中央公論社出版部の第一作として刊行されて、たちまちベストセラーとなった。同作は、同年11月、村山知義らによって劇化され、米ユニヴァーサル社による映画化作品（1930）は、1930年10月に日本公開される。同じく第一大戦に材を取った外国文学としては、ヘミングウェイ『武器よ・さらば』（1929）が1930年5月、ドルジュレス『戦争の溜息』（原題『木の十字架』）が1931年2月に邦訳が刊行されるが、前者については刊行時期からして、『西部戦線』ブームにあやかろうとしたものとして片づけるわけにはいくまい。むしろ、戦争という大惨禍がもたらすニヒリズムに共鳴する下地のごときものが、危機の時代前夜の日本において準備されつつあったと見なすべきだろう。世界大戦表象の受容にまつわるこうした時間差はまた、日本モダニズム・モダニティが本質的に孕む時間差と、当然のことながら、深く関わり合うものであった。

一方、戦争を直接描いてこそいないが、大戦前に書き始められ、大戦を挟んで書き継

がれていったという点で大戦の所産とも言うべきプルースト『失われた時を求めて』は、その第1巻第1部が堀井基次郎の友人淀野隆三によって訳出され、堀辰雄、川端康成、横光利一らが編集同人を務める雑誌『文学』に、1929年10月から翌30年1月まで掲載される。この時期のプルーストの翻訳紹介が、それ以降の日本近代文学の意匠や表現や文体の有り様を、いかに大きく更新していくことになったかについては、あらためて指摘するまでもなからう。詩の分野でモダニズム運動の一大拠点となった春山行夫編集による詩誌『詩と詩論』は、1928年9月に創刊され、詩の理論と実作のみならず、同時代西欧の文芸理論・文芸思潮の紹介という点においても、1930年代日本文学を先導する役割を果たしていった。

本シンポジウムにおいては、第一次大戦の衝撃と余波が、西欧文学の相貌をいかに変貌させたのかを踏まえた上で、そうした戦争文化的深層を基底にもつ文学や芸術運動を、「戦後」意識の希薄な昭和日本がどのように取り入れ、結果として自らのモダニティをいかに成立させ、あるいは書き換えていったのかを、ドイツ表現主義の移入、アメリカニズムの諸相、モダニズムとマルキシズムの相関、詩的モダニティの展開などに論点を絞りながら、比較文学比較文化の視点から再考してみることとする。論点は多岐にわたることが予想されるが、日本モダニティの成立・変容における、モダンなるものの世界的同時性と時間差との問題には、あらためて光を当ててみたい。モダンなるものをめぐるタイムラグは、西欧近代に対する遅れや、史的発展の不均等だけで説明されるものでは到底なく、かつて今和次郎「考現学」が示唆したように、モダンの現在の内に共存する過去（と未来）は、一国一文化のモダニティの特性を解明する上で鍵を握る概念と考えられるからである。（文責・井上健）

以上の趣旨に基づき、下記の報告が行われた。井上は「第一次大戦期日本とアメリカニズム」についての報告を行い、最後に椎名正博が、それまでの報告にコメントするとともに、フランス文学関係の事例（ジッド、石川淳）を補足した。

## 1. 西岡あかね「表現主義受容と震災後日本」

大正期の日本でドイツ表現主義が受容されていった経緯と主な受容傾向を、新聞や雑誌の展覧会評、書評、劇評から読み解く。その際、日本での表現主義受容が本格化したきっかけが関東大震災の経験にあることを指摘し、思想的関心からの受容にも、様式的関心からの受容にも、この災害による破局の経験が反映している様を、いくつかのテキスト（小山内薫、田山花袋、横光利一など）をもとに明らかにしたい。



## 2. エリス俊子「日本モダニティの成立」

本報告では、1920-30年代日本語詩の運動に焦点を当て、日本的モダニティの成立の問題について、それが第一次大戦後のヨーロッパと、「ア ジア」の辺境にある日本との地理的・時間的な落差を受けて展開しつつ、日本が受容した「戦後」が、時を経ずして帝国主義的な伸張に伴う「戦前」の様相を呈していった過程について、両者の重なりの問題を中心に考察する。

## 3. 林淑美「ブレヒトと『中野重治詩集』—革命の時代の詩人たち—」

昭和文学が大正文学と異なるのは文学者が世界的同時性ともいうべき意識をもったことだ（平田次三郎）、という指摘を言い換えれば、第一次大戦は、文学を含む日本の文化状況の世界的同時性をもたらした、となるだろうか。それは文化状況だけであるはずがないから、あらゆる意味において大戦が「新時代の到来を象徴する」（ジェームス・ジョル）ことの同時性であった。大戦後は革命の時代でもあった。ベルトルト・ブレヒトの芸術はこの新時代を表現するものだ。日本にも革命の時代が訪れた。ブレヒトの詩と中野重治の詩との時代的共範性を明らかにしたい。

## 《記録》

### 研究発表 2014 年

#### 2014 年 1 月例会（青山学院大学）

- 石川雅望の読本における典拠利用について —『近江県物語』を中心に—  
山名順子（川村学園女子大学）

- ペルセウスの怪獣退治とスサノヲの八岐大蛇退治  
山口博（聖徳大学）

#### 2014 年 3 月例会（日本大学法学部）

【特別企画：芹沢光治良特集】

- 第一部  
芹沢光治良に受け継がれた有島武郎の精神  
—フランス留学時代（1925-1928）を中心に—  
杉淵洋一（愛知教育大非常勤）

- 第二部  
芹沢光治良 —有島武郎の『草の葉』会と東京の有島記念会に関連して—  
小玉晃一（青山学院大学名誉教授）

- 特別講演  
作家芹沢光治良の肖像 —父と暮らした日々—  
岡玲子（沼津市芹沢光治良記念館）

#### 2014 年 4 月例会（鶴見大学）

- 美術における「極東」 —ラファエル・ペトルッチとベトナム美術—  
二村淳子（東京大学・院）

- よしもとぼなな作品の英語翻訳について —翻訳で失われた五つのレトリック—  
芳賀理彦（敬愛大学）

## 2014年5月例会（鶴見大学）

- 作家研究年表の東西比較  
木内徹（日本大学）

- チャーホフ『犬を連れた奥さん』はいかに翻訳されてきたか  
—コンスタンス・ガーネットによる英訳の検討を中心に—  
沼野恭子（東京外国語大学）

## 2014年7月例会（日本大学法学部）

- ハーヴァード大学比較文学科見聞録  
秋草俊一郎（東京大学）

- シェイクスピア翻訳劇上演の可能性を探る  
門野泉（清泉女子大学）

## 2014年8月例会（日本大学法学部）

【特別企画・講演】

- ヘンリー・ジェイムズの『使者たち』における創作手法と欧米文化の衝突について  
秋山正幸（日本大学名誉教授）

## 2014年9月例会（日本大学法学部）

- 施蛰存とハムスンの作品にみられる敏感関係妄想に関する一考察  
—両者の夢表象を手掛かりにして—  
徐曉紅（東京理科大学非常勤）

- 研究と創作の間で —真相と虚構—  
佐藤三武朗（日本大学）

## 第 52 回東京大会（二松學舎大学）

### ■夏目漱石『野分』の「カルチュア」

—大正期「教養」／「文化」概念成立への形成過程—

大山英樹（青山学院大学・院）

### ■極東への旅 —1929年のローレンス・ビニヨンの訪日、訪中について—

範麗雅（読売日本テレビ文化センター非常勤）

### ■谷崎潤一郎における人魚のモチーフと浅草 —「鮫人」を中心に—

朴恩恵（東京大学・院）

### ■西洋文学を私小説として読み直してみる —太宰治『女の決闘』を巡って—

イザベル・ラヴェル（パリ第7大学・院）

### ■『ヒロシマ・モナムール』から『H story』へ —「戦争の記憶」、その表象と継承—

宮田文久（日本大学・院）

### ■コンラッド、コッポラから村上春樹へ —村上作品の創作の原点と本質を探る—

岡田善明（日本大学非常勤）

### ■大正期恋愛至上主義を背景とした「結婚した親鸞」の表象

—石丸悟平による「親鸞文学」を中心に—

大澤絢子（東京工業大学・院）

### ■日本近代における「恋愛輸入説」

—「理想化された恋愛観の輸入」「キリスト教」「世俗化」について—

加藤隆（千葉大学）

## 2014 年 11 月例会（東京大学駒場キャンパス）

### ■文学史と美術史の交差

—昭和初期の文化財保護行政と『源氏物語』—

永井久美子（東京大学）

■三千代の神経衰弱と S. Weir Mitchell の休息療法

仙葉豊（関東学院大学）

## 2014 年 12 月例会（清泉女子大学）

■翁久允研究の方向性について

—そのコスモポリタニズムと複合アイデンティティをめぐって—

須田満（翁久允財団）

■佐藤春夫におけるドイツ文学の受容

富岡 悦子（鶴見大学）

## 執筆者一覧

(掲載順、敬称略)

- 小玉晃一 (青山学院大学、名誉教授)
- 山口博 (富山大学・聖徳大学、名誉教授)
- 大山英樹 (青山学院大学、院生)
- イザベル・ラヴェル (パリ第7大学、院生)
- 仙葉豊 (関東学院大学)
- 須田満 (公益財団法人翁久允財団)
- 秋山正幸 (日本大学、名誉教授)
- 岡玲子 (マグノリアの会 (芹沢光治良記念会))
- 井上健 (日本大学)

日本比較文学会東京支部 研究報告 No. 12

発行人：ソーントン不破直子

事務局住所

編集委員会（編集担当）

委員長：西村靖敬

委員：佐々木悠介

高柳聡子

信岡朝子

橋本由紀子

〒152-8552

東京都目黒区大岡山2-12-1-W3-29

東京工業大学外国語研究教育センター

戦畷梅研究室

TEL/FAX: 03-5734-2666

E-mail: sen.g.aa@m.titech.ac.jp